

---

# 王妃！ いや、女将と呼べ！

かくりな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王妃！ いや、女将と呼べ！

### 【Nコード】

N2523P

### 【作者名】

かくりな

### 【あらすじ】

母の急逝により妹が成人するまでと、家業である旅館「和楽屋」で代理女将として勤んでいたある日、突然「王妃の召還」というとんでもない事態にみまわれた。その国は争いも終結し、平和を取り戻そうとしてはいたけれど、民の活力もいまいちで、常識もかけ離れた世界だった。その国で私は奮闘する。王である旦那様とは愛を繋げられればいいのだけれど、そちらもどうなることか。

だが、これだけは言いたい！ 私は本来料理長になりたかったのにつ！ という大人の女性の「未知の世界」での生き方を、時々

シリアスに、時々ほのぼのと描いていけたらいいなと思っています。

1： こんってなんなの？（前書き）

女のと根性が書ければいいなと構想しております。尚、設定等が甘い為、御見苦しい点多々あるかと思いますが、それでもよろしければたまぁ〜にお付き合い下さいませ。

ペコッ！

1：これってなんなの？

パチツパチパチツ

耳元で静電気が弾ける様な音が数回なっただかと思うと突然目の前が暗転した。

「うわっ！！」

何？！

啞然としたまま思考がつかない時間がどれくらい経つたろうか。

それでも条件反射の如く持っていた花鋏を逆手に持ち直し、片膝を立てて異様な状況に身構えている自分がいた。

今日は大事なお客様（師匠）をお迎えする為に、特別にあつらえた白地の小紋、カラフルな小花がちり所々金糸の刺繍が施された仕事着にしては気合と身銭の詰まった特別な戦闘服を纏っていたはず。しかしその裾が見苦しい様にパツクリ割れて片方の膝小僧が丸見えの状態だ。

こんな姿はあの大鬼様にだけは見られるわけにはいかない。そんな事をつらつらと考えていた。

わーお、だんだん景色が浮かんでくる……

白昼夢？ 塵気楼？ んなばかなっ！ 右手に花鋏、左手に刺そうとしていたショウブが一輪、今にも潰されそうな勢いで握られていた。

ただいつもの花替えをしていたはずなんだけど。ご機嫌も上々のはずだったんだけど。まあこの際ご機嫌はどうでもいい。

これは…… 疲れているんだろうか？

まさかの突然のお迎え？ 嗚呼、だったら神様これだけは聞いて頂きたい。

私、和楽<sup>ワラク</sup> 藤華<sup>フジカ</sup>、28歳。 これまでの短い人生、家業である旅館「和楽屋」を一心に愛し、多少は人より真面目に学び、大きな大きな料理長になるという夢に向かってひたすら修行に明け暮れていたのですが……

いえ、紆余曲折あり元女将であった鬼ババ様（母様）が三年前に急逝しましたからね、本来妹が女将業、私が料理場を継ぐというはずだったのでございますが、なんせ妹は当時16、学生でもありません。まだまだ幼すぎて任せる訳にはいきませんでした。 そういう訳で妹が成人するまでは私が代理女将をやれというのが大鬼ババ様（大女将「お祖母様」）からのご命令だったのでございます。 無論逆らうわけにも参りません。

中学の頃から部活動と称され、番頭とも言うべき事務方支配人の小間使いとして旅館の経営を学び、W鬼様からは所作は勿論の事、花や着物にもうるさく言われ学んで参りました。

卒業とともに高校へは進学せず、大鬼ババ様の知り合いの料亭へ武者修行の旅に出されましてね、ようやく十年という年月が経ち、我が旅館に戻る日が間近という矢先の事だったので。 正直四年も板場を離れる事に大いなる落胆を味わいましたが、これも大事な「和楽屋」の為と、身を叱咤して女将修行にも励んでいたんでございますよ。

ああ、うるさい鬼ババ様には逆らわず、もつと恐ろしい大鬼ババ様にも怯えて、小さく小さく暮らしてきた小鳥はとうとう神にも振

り向いてもらえなんだでしょうが…… もっと、悪党な奴等とか、小悪党な豚輩とか成敗すべき対象はいくらでもあったでございませうに。

何故、何故私のような善良な小童乙女をお召しになるのか。

混乱に乗じてあれやこれやと神様に嘆願という体の恨み言を呟いていたら、何時の間にか目の前の異様な光景を忘れてがつつり目を閉じ両手を握り締めていた。

嗚呼、哀れシヨウブよ。 。 チーン

ザワザワザワ      ザワザワ

まだ神様に言いたい事はありますが、なんだかざわついているような気配なんですけど。

とはいえ、極楽を目にするのも怖いんですけど。

目を閉じていても、その場が明るくなっていることは分かる、肌にあたる風の感覚も匂いも感じているので屋内ではないのだろう。往生際悪く瞼にぐつと力を込めてみる。

こつこつ時は第六感が冴えると言うのではないか。 気を読め、心の目だ。 我はピッコロ星人（何故?!）

「 おい！」

ん？ 呼ばれたか？

「おい、黒の姫よ」

クロノヒメ？ 誰のことだろう。

「そろそろ目を開けたらどうだ？」

私か！

苦情を聞きつけて、とうとう神様きちゃったか。 神様が来たというよりこの場合は私が神様の下へ行つたと考えるべきか？（神様！ちなみに私は色黒ではありません！）

まあ仕方ないかなあ、いつまでもこのままじゃ埒あかないし。対峙してやるつもりで声のするほうに勢い良く顔を上げた。そして、うっすらと目を開く。（セコッ！）

「おおおお…… おおおおおおお……」

周囲から感嘆のようなざわめきが起こった。

私とは言えば、想像しやすいベタな展開だろうが、その周りの声につられて目を見開き眼球だけで見回しながら口をぽっかりと開けていた。

乳白色の透明感のある岩の中？ みたいな、それでいて風は感じている声もクリアー。

何がどうなっているのかは分からないけれど、その岩を取り囲むように兵士のような武装をした男達が剣の柄に手をかけて構え、その後ろに長たらしい立派そうな衣装を着た男達が並んでいる。

そして、私の正面には代表者であろう、これまた偉そうな服に身を包んだ銀の長髪男が半目で私を睨んでいる、ように見えた。

ついさっきまで、神様が極楽かと思っていたことなんて頭の端っこのどこにも残ってはいない。大勢の人間、しかも現実感のない外国人風の男達に囲まれ怯えよりも先に漫画か？と、冷めた自分がいたような気がする。

「ようやく来られたか。ソルニアード、出せ」

偉そうな男が隣に立つ金髪男に命じると、その金髪はぶつぶつと呪文のようなものを唱えだし、そしてみるみるうちに、乳白色の岩がなくなっていく。視界がより鮮明になり反射的に肩がびくつと震えた。

「ようこそ黒の姫様。我等がカニムーチョ王国へ」

金髪男はそう言って、私ににこつと微笑みかけた。  
まさに漫画だ……

カニ？ でムーチョ？

「……………」

なんだろう、切ない……切ないね…… 金髪イケメン君。

良い男が、何が悲しくて誇らし気にボケるのか。そんな場合か

？ いろんな事をすっ飛ばしてそこだけが妙にくすぐる。

王国と言っただろうか？ てことは国名なのか？ それはそれ  
かなり切ない響きのような。 なんだらうこのモゾモゾ感……  
いやいやそれは失礼だな。 きつとこんな混沌カオスな状況じゃなきや  
噴出していたか、もしくは半目で引いていたかもしれないが、とに  
かく国の名前を馬鹿にするなどもっての外だらう。 うんうん、申  
し訳ない。

しかし、カニ……か。

私の頭には、ばあちゃんの隣で「ヒーヒー」火を噴き踊りまくる  
カニが浮かんでいる。

「むふっ」

ヒーヒーが木霊する。 駄目だ！ 堪える！

たいしておもしろくもないだらうと自分に突っ込みながらも、知  
らずパニックからのハイになった脳味噌では堪えきれなくなってい  
た。

それでも俯いて必死に唇を噛むことで、かろうじて肩のプルプル  
だけで押さえられたけども。 危機感薄いな、おいつ！

しかし、それを見ていた周囲の面々は神から齎された黒の姫が怒  
りに震えていると勘違いしていたのだった。

だって、左手のショウブの茎がポツキリ折られたのだもの。 嗚  
呼、無情。



## 2： ふわふわしてますから

漸く私の震えも収まり、辛うじて（ほんとに辛うじてだぞ！）冷静さを取り戻した頃、新たな刺客が前に躍り出た。

白っ！ という印象そのままに頭髪も衣服も白一色で、長く伸ばした顎鬚も同じく真っ白、おまけに御年を体現したかの様に若干薄く猫毛風。しかし落ち着いた雰囲気と、穏やかな微笑みに併せて目尻に深く刻まれた皺は老大家と呼ばれるような、もしくは仙人と呼ばれるような、そんな動と静を顕す不思議なご老人だった。

「黒の姫よ、混乱しておろうのう」

声を上げずに乾いた笑いを漏らしながら近づいて来るが、怖いとは思わなかった。

「ここではなんじゃから、場所を移して話をしようかの」

ゆっくりと手を取られ、立ち上がるよう促された。私は立ち上がり際、開いたままだった裾をしゃきつと払い、襟元を指先揃えた綺麗な所作で整えご老人に軽く会釈と微笑みを返す。甘く見られたいけないのだ、和楽屋の女将として！ そんな自然に出た矜持だったと思う。（足を広げておいて今更なのは触れないでおく）

すると奥から進み出てきた銀髪の偉そうな兄ちゃんが、私の膝をさらっと掬い横抱きに抱き上げてしまった。その間わずか2秒。

びっくりしすぎると声ってでないもんだ。改めて暴漢に襲われたらこれじゃだめだなんて妙な事を考えつつも、ガツチリとした男の体に密着というか、抱っこされては内心慌てないわけがない。

しかも、かなり良い男だ。銀の髪がキラキラと反射して青い目

が私をじっと見つめている、くつと口元は引き結ばれ、なにかに出てきそうな王子様みたいだなと感心する。

ちなみに、未だに現実感はない。その上私は一言も発してはいない。

「足元、このまま抱えて参る」

なんだ、その単語口調。

まあ考えて見れば足袋のままだ、当たり前だけど。汚れない様に親切として言ってくれているんだろうから、ここは素直に従っておくべきだろうな。

「あ、ありがとう……」

私の第一声だった。

なんだか、抱っこされたまま歩き始めて周囲の光景が気になって仕方がなかった。岩のあった場所は支柱が美しい神殿のようだったし、長い廊下に赤絨毯（なんで豪華な絨毯の定番が赤なんだろうね？）所々には絵画や彫刻が飾られてはいたが、なんせ薄暗いので良いのか悪いのか判断しかねた。そしてようやく一つの部屋に辿りつく。両開きの細工の施された艶のある大扉、中に入れば応接間のような空間。そこにあるソファの一つに体を降ろされたが、いかなせんてか過ぎて背もたれにもたれようなら膝がピーンと伸び上がりそうな大きさだった。

他にも色々と装飾品というか美術品が並んでいたり高級家具だろうものが配されてはいたが、私の中で長い廊下&赤絨毯というキー

ワードから、ここはお城だなと予想していたのでふーんという感想だ。それが何故かと聞かれても、お城と言えばこうだろうとしかいえない所が悲しいが。(乏しすぎる！)

そしてようやく数名が席についた。あれだけ前後左右兵士のような男達に囲まれて移動してきたにも関わらず、この部屋にいるのはたったの五人。私は長椅子の奥に座っていたが、その右隣には先程のご老人。左手コーナーをはさんで上座の椅子には銀髪男。私の正面には呪文の金髪男。そして最後下座側の椅子にきりつとダンディーな紳士が座している。口火をきったのはダンディーな紳士。

「黒の姫様、此度は突然のおよびたて真に申し訳御座いません。私は宰相を賜ります。モングラント・デュー・コルセラ」

かすかに口角を引き上げた紳士はそう言って胸に片手をあてた。真っ赤な髪は綺麗に撫で付けられ几帳面さが窺える、眉毛まで赤くて凛々しく整っているのが特に印象的だ。モンブランかモグラか知らないけども、ほんとに漫画の様でおもしろい。

私は「はい」と小さく返事をしただけ。

「……随分と落ち着いていらっしやる、女性の御身でこの状況は恐ろしくございませんか？」

「怖いかな怖くないかと聞かれれば、まあ怖くはないです。ただ理解が追いつかなくて混乱中ですから、とりあえず黙って聞いてみようと思ひまして」

ちよつと苦笑を滲ませてみれば、軽く瞠目され「承知しました」と返された。

「まずは、こちらにおわす方々を御紹介させていただきます」

そう言つて銀髪の男に視線を向けた。彼の名は「ジョジウラーニ・グルン」この国の王太子様だそうだ。どつりで高貴な感じがした。(決して偉そうとは言わない、大人だから)

先程抱えられていたのでちらりとは観察済みだが、改めて見ると青の目がやっぱり綺麗だった。美形と言つてしまえば一言で片付くがにこりとも愛想のない真顔が癪にさわる。

次に金髪の男は名を「ソルニアード・デユコワ」二番目の王子様で神殿の長、つまり司祭様のような感じだそうな。

こちらは比較的柔和な印象だ。兄弟で持つ色が違う事が興味を引いた。髪は金色でこちらも長髪ストレート、目が薄いブラウンなので夏の日差しは厳しいだろうな〜というのが率直な感想、ただし美形なものには変わりない。

最後に白いご老人、彼の名を「ムザツカ・コワ・ミルキーノ」と言い、神殿の元長で現在は相談役のような立場らしい。宰相さんの口ぶりといい、やはり仙人という認識で間違つてなかった。(ほんとかよっ！)

一通り彼等の紹介が終わると私に向けても名を尋ねられた。

「ご丁寧な紹介を有難う御座います。私は、藤華<sup>フジカ</sup>・和楽<sup>ワラク</sup>と申します。家業である旅館にて現在女将の仕事をしておりますが、本来

は料理人でございます」

営業用の柔らかい女将スマイル&物腰で述べれば、皆が皆大袈裟な驚きスタイルでのけぞり、こっちの方がぎよっとなった。

おいおい、今の女将所作は大鬼ババ様にも合格をもらえた唯一の私の武器だぞ！

どこにそんなに驚く…… 顎、顎を閉じろ、銀金王子。

「し、失礼ながら、私どもに女将なるものがどういったものは存じ上げませんが、姫様は家業に携わっていらしたと？」

「はい、その通りです。まだ若輩で満足のいく仕事は出来ておりませんが、一応宿を取り仕切る女将という立場についております」  
(と、いつか、私の事はどうでもいいんだけどっ！)

宰相さんは、はあと気のない返事をする——っ咳払いをして背を伸ばした。いよいよ本題かな。

周りは全然しゃべらないけど、今は私と同じく様子見のスタンスといったところか。

数秒の沈黙の後、じっと私を見据えた宰相さんは意を決したように語りだした。

しかも本丸から。

「姫様には、こちらのジョジウラー二殿下に嫁いで頂きたい」



2： ふわふわしてますから（後書き）

なかなか良いところまでたどり着けてないですが、次話に繰越ます。  
すみません。

3： 言語のみが理解出来ます

「姫様には、こちらのジヨジウラー二殿下に嫁いで頂きたい」

はっ？！

あ、今のは声に出ていたな……

アホ面を下げた私のことは構わずに、宰相さんはどんどん進める事にしたようだ。

「我が国に賜った神の御言により、此度 ” 黒の姫 ” 様を御召還と相成り、そこにお越し下さったのがフジカ様というわけです」

それからこのダンディー紳士が語るには、百年程前に神様からご神託という有難いお告げをもらって、それがこの国の王家に銀を持つ子供が産まれたら伴侶には黒を持つものを据えると、国の大繁栄に繋がるのだとか。

もう何回目になるんだろう、なんだそれが 浮かぶ。 実に御伽噺だ、実にファンタジック。

笑い飛ばせばいいのか、鼻で笑えばいいのか、はたまた呆れて見せればいいのか分からない。 さすがに大真面目に語っている男性を前にして怒り狂うという選択肢はなかったが、とにかくこちらのリアクションに困る内容だ。 私は首を左右に傾げ「むーむー」と唸るに留める。

暫し考え中だ。

( 考え中

考え中

考え中…… )

チ

ーーン

「あの……、私のメリットは？」

この際、どんだけ利己的なんだと思われようと構わない。何故私が見ず知らずの男に嫁ぎ、縁も無い国の為にならねばならん？

こつ言っちゃんだが、私は家を心底大事にしているし、ひいては住み慣れた町、方言が蔓延る我が地方、その大元である国を愛している。だからと言って例え日本でお国の為にと言われても、結婚する相手を押し付けられて「はいOKよ」とは言い難い。それをふまえて何故カニの国に尽くさなきゃならん、自然な疑問だ。という趣旨の事をなるべく丁寧な角の立たなそくな言い回しで伝えてみた。

相手方に見れば上滑りの言葉から私の本心をそのまま受け取ったような気がしないでもないけど……。それならそれで話が早いかもしれない事にした。

しかし私の質問が予想外だったのか、銀は変わらなかったが、白は含み笑い、金とダンディーは目を丸くして口を開けていた。

「ひ、姫様、この王子ですよ？」

「はい」

「王太子の妃という事は、ゆくゆくは王妃という事ですよ？」

「はい」

「……それ以上に望む事など逆にお有りになりま・す……か？」

若干王子に対してお言葉が乱れておりますが、そこはほつといて、この国では王妃になるという事は最上級の女の幸せと考えられている感じが伝わってきた。それだけではなく、こんなイケメン王子を袖にする奴なんているのか？　みたいなの？

所変われば見方も変わりますからね、それ自体を否定したいわけではありません。ただ私にとってはどちらもどうでもいい事だっただけで。（いや、イケメンに越したことはないけどなっ！）

とりあえず正直な気持ちが一番の誠意だろう、と言いたい事は言わせてもらう。

「あの、失礼かもしれないって事は分かっているんで、先に申し訳ありませんと言っておきますが、そのどこがメリットですか？　確かに王子様は素敵な男性だなとは思いますが、ですが、先程から仏頂面の様ですしご本人も乗り気ではないとお見受けしています。それに王妃様という職業の事詳しくは存じませんが、これまで私が修行してきた分野とは恐ろしくかけ離れているわけですし……第一、そんな柄じゃありません。姫様でもなんでもないんですから」

しーんと沈黙が起こった。そしてその場は、私と未知の生物達との静かな戦いの場でもあったように思える。目を逸らした方が負け、俯いた方が負けという一種の仁義無き戦いだ。

長い時間だった気がする。

そして結果、勝者は私。銀の王子が疲れた素振りでごめかみを

揉んで頭を振った。

「お前の言は分かった。だが、こちらも簡単にそうかと言うわけにもいかない。お前の望む条件を言ってみる。出来る事なら全て叶えてやる」

おお〜！ さすが王子様といった傲慢なおっしやりようだ。でもねえ、いきなり条件って言われたって、そうすらすら出てくるもんじゃないし…… なんだか条件さえあれば納得しちゃうの？ みたいな疚しい気がしないでもないですが、嫌だ嫌だと喚くのも成算が立たないし、とりあえずこんな時は常套手段か。

「では、この件は一旦持ち帰らせて下さい」

「どこに帰る、しばらくは戻れんぞ」

だと思った！！！！ って、そういう意味じゃねーよ！ と心の中で盛大に毒づいてやったぞ。ギロツと睨んで溜息をこぼす。

「考える時間を下さい」

その言葉を合図にがつくりと肩を落とす。それは私だけじゃなく銀を除いた面々もだったけど。

生まれて始めてのプロポーズと言えるかは分らんが、本人から

ではない求婚に思った以上に疲れを感じていた。

肝心なここは何処？ みたいな事はさっぱり聞けないでいたけど、とりあえずの危険は無い様だから今日のところは逃げよう。明日また話をしてくれるらしいので、それまでに条件とやらを纏めて納得してもらえばいい。ここで一先ず思考を停止する事にした。

そしてこの日から私の未知世界が始まった。

この時はまだ詳しい事は知らない、この場所がどんなに過酷を極めるか。そもそも何も聞いていないから。だけど事が突拍子もなさすぎて自分の適応能力が衰えている事を認めざるをえなかった。とにかく帯を緩めたい。それだけ。

去り際に皆様の顔を窺ってみたけれど、銀は視線を合わさず、金はゆっくり休んでと気遣ってくれた。白は何か話したい事があったみたいだけでも、心の中で深く謝りその場を辞退することにした。

それからダンディーに盛大な部屋に案内されて、これじゃよっぱど落ち着かんわと一人文句もたれてみたが、ふーっつと一息ついたところで辺りがだんだん暗くなっている事に気が付いた。それと同時に顔面蒼白。

「ギャーっ！っ！！ 師匠が来るんじゃないっ！っ！！」

適応能力以前に、現状把握能力が著しく低下していることに頂垂れた。



3 : 言語のみが理解出来ます (後書き)

主人公は肝が太いのかにぶいのか微妙なところ・・・

#### 4： 苦い汁はごめんです

一晩明けました。 ゲツソリしております、色んな事にね……。

「……………」

「どうだ？ お前の条件はまとまったか？」

昨日と同じ場所、昨日と同じ面々。 変わった所と言えば私の衣服と疲れきった肌荒れ目の下のクマ。 一晩中考えてある程度の条件は決めてきた。 けどまだこの国の事情を何も知らない段階で、こちらの手数だけ見せるわけにはいかない。

今朝方、結局そう結論付けてまずは説明を請うことにした。

\*\*\*

この国は王制であるという事、三年前まで貴族間で続いていた内乱を王ではなく王太子自らが鎮め、そのおかげで彼は民からの信望を集めたらしい。

これを期に、一気に婚姻と王の戴冠を同時に行いたいというのがあちらの目論見だ。

いくなれば王子様でありながら英雄、地位あり、財あり、手腕もあり、とどめがこの容姿と聞いてて寒くなる持ち上げようだった。

それに付随して周辺諸国の話も少し聞いた。 カニムーチョ王国は西に海を持ち、他には三カ国と国境を接している。 国の規模としてはぼちぼちらしい。

そのぼちぼちってのは、大陸内には巨大帝国が一つあり、それに對抗する様に大きな国が二つ、その他小国家含めて二十ほどの国が

存在し、その中では中規模国家で、他国との交易は盛ん、国庫は意外と潤っているとのこと。

それでも建国以来この国が、唯一神の光臨する聖地と認識されている為、侵略などを受けたことはないのだそうだ。それもすごい話だなと正直思う。

彼等のセールスポイントを纏めると、よその国とは戦争もなく、比較的金もあつて、緑豊かな神に愛された大地である。ということかな。その話だけでは、なんと素晴らしい国なんだろうとなりそうだが、全てを鵜呑みにする程子供ではない。

事実この国、争いもない、資源も豊富というのにいまいち活気が見られない。昨日から女性を見かけたのは一人だけだし、城内はどこか薄暗く地味な印象が拭えないのだ。それに昨日一晩泊まっただけでも、私にはどうしてもただけない部分があつた。

完璧とは言いがたいが、ここまで様々な質問を混ぜながら教えてもらった事を考慮して、こちらも何がしかの意思は見せる時だろう。

息を吸い込み一度深く目を閉じた。 いざ出陣だ！

各々方よろしいか！（一人ですが）

「少しですが、この国の様子も想像する事が出来ました」

ほう、と王太子である銀の男が目を眇めて私を見た。続きをどうぞと言わんばかりの視線に、ちよつとだけ、本当にちよつとだけ怯んでしまったが、こんなプレッシャーも大鬼ババ様に比べれば可愛いもんだと、内心鼻を鳴らして微笑を浮かべた。

「とりあえず考えた条件というものを提示させて頂いてもかまいませんか？」

黙って目だけで頷いた王太子、金、白、赤も見渡して、私は「では、その1」と交渉を開始した。

その1、調理場を頂きたい

その2、私が指揮権を握れる部下を数名頂きたい

その3、仕事に関しては理解と協力を頂きたい

その4、里帰りは自由にさせてほしい

「そして、その5、夫婦となるならきちんと愛して頂きたい。

今の所は以上です」

絶対に嫌だとただ撥ね付ければ、あちらも意地になるのは目に見えている。なんせ神という大義があるのだから。

交渉がもし失敗して家に戻れない事にでもなれば、それこそ今までの修行も無駄になるどころか、この漫画な世界で死を見る事になるだろう。だから敢えてこちらも多少譲歩を見せる姿勢で臨んだ。

苦渋の決断だ。勿論言うまでもなく私は「和楽屋」に帰りたい。

だけど、だけど と、堂々巡りの中決めたんだ。私がいなくても妹は来年成人する、板場も料理長は現役だし下にもいる。せめてたまに帰してもらえらるなら家とは繋がっていられる。そこまですら悲傷中の私を組んでほしい。武士の情けを是非頂きたい！（町民だけだな）

言い切った私の周囲は、それはそれは筆舌尽くし難い奇妙な空気が流れていた。その1の時点でそれぞれが目を剥き、その2、その3では不可解な顔つきに変わった。そしてその5を述べた時には、銀の男からゴクリと喉が鳴った。それっきり空気を止めた様な固まりようで、私一人がずっとカップを啜っている状態。私としてはやりきった感でほっと一息肩でも回してみたい気分だったが、周りはそうでもないらしい。どうしたもんかと暫く黙っていたら、宰相さんが一番に立ち直ったようだ。

だが言葉を発しようとした宰相さんを制して王太子が反撃を開始する。

「なんとも珍妙な条件だな。こちらを試しているのか？」

「（どこが珍妙なんだ、こちらとしては甚く真つ当な要求だ） 試すの意味が分かりませんが、素直に要望を述べたまでです」

「お前も女ならば、財と子種を強請るものじゃないのか？ 全ての条項において質問があるが」

「（何が言いたい） 仕事をして夫婦仲が良ければ、自然とどちらも手に入りますね。 質問はどうぞ」

「普通、女は働かん」

ピリっとした空気に変わり、王太子が冷たく吐き捨てた。

「は?!」

「は、働かんってどういう意味ですか？ 女性の職業がないと

「じゃ、じゃあ女性は何してるんです？」

矢継ぎ早に詰問始めた私に宰相さんが落ち着いて下さいと宥め、王太子の後を継いでくれた。

その内容はひどく頭の痛くなるような話で、女性に職というのは存在せず、簡単な家事と子育て、昼寝と神への祈りで過ごすのが一般的だそう。仕事は男がするもので女性はひたすら庇護の対象、と言えば聞こえはいいが、働き手となる男児を産む為に祈りと昼寝を捧げる。昼寝ってなんだよと問えば、日中体を休めると男の子を孕みやすいと昔から信じられているのだとか。実際女兒が産まれた場合、余裕のない家庭は修道院のような場所に子供を預ける、それがまた国営らしくその為の国家予算は莫大だと言う事だ。はあぁ〜頭いた……。

「して、まず調理場とはどういうことだ」

私の脱力を無視して王太子がさっさと質問を始めた。くそもう少し空気読め。

「二度程、お食事を頂きましたが、不味かったので」

こちらの料理人に無礼も承知だが、ここで遠慮したら負けだ。高圧的な態度もムカつくし。

ぐつと誰かが漏らしたけど、王太子はそのまま続けた。

「お前は料理人だったと言ったな、では、王妃になるお前が自ら食事を作ると？」

「（悪いか！） はい。 はっきり申し上げまして、こちらの食事は肉は筋だらけで固く、塩をふって焼いただけ。野菜はくたくたに湯掻かれ甘い蜜が乗せられただけ、しかも家庭ではなく少なくとも

も城の客に出される物とは思えない程、形も不揃いで見た目も悪い。汁物は全く出汁がきいておらず湯に香辛料を加えた様な薬かと思わせる物でした。普通に食べれたのは唯一目玉焼きのような卵で、他にもパンは固……」

「もう良い。口に合わないというのは十分分かった」

私の言葉を途中で遮り王太子はふう〜と溜息をこぼす。まだ言い足りない。始めは失礼だから軽く”飯が不味いこんな所には居られない、嫌ならそれでいい”と訴えるつもりだったのに、しやべり始めたらついに熱くなって思いのたけを切々と語りまくっていた。(昨日からの一番のストレスの原因だったんだ!) 墓穴と言えば墓穴だ。

ちよつと反省モードに入っていたら、またもや王太子はスルーして次の質問を始めた。

4： 苦い汁はごめんです（後書き）

ちよいと説明ばりでしたか。 退屈だったらごめんなさい。

## 5：沈黙・硬直これ基本

「部下は何に使う？」

王妃に仕事なぞないだろという小馬鹿にした一方的な物言いだつた。

それならと半ばムキになって”なら、逆に王妃の役割とはなんだ”と詰め寄ったら、子を産めと。話にならないと投げ出してしまいたくなつたが、交渉の場では取り乱した方が負けなのだろう、胸を拳骨でドシドシ叩いて気を静めた。

「仕事をするのは当たり前前の事です、昼寝したって子供なんて出来ませんよ」

落ち着けと言い聞かせながらも、不貞腐れた心境はなかなか制御出来ない。常識と非常識の基準が違う者同士でどう説得すればいいのよ。

あゝもおゝ腹立つわあゝ！

向かいの席から金の王子が「まあまあ」とあやす様に微笑むが、お前いたのかよ！ という感じた。

しかし王太子の男には、今の発言がかすかに琴線に触れたようだった。

「おもしろい事を言うな」

始めて相好を崩したので、手応え有りと揚々と猛追に出る事にした。

「そうでしょう。」

女性の社会進出はあるべきだと思います。

女

だつて誇りを持てれば生き甲斐にもなる、生活も潤う、我が子を捨てずに済む、国庫だつて助かるじゃないですか」

「神の意思に背くと？」

「神様が、昼寝してるとでもおっしゃったんですか」

「なんだよ！ ちょっとは乗り気じゃなかったのかよ！

まだしゃべるなよ、ついでに言わせてもらうから。」

「お話を聞いて思いましたが、自分の身近でも女の働き手は必要です。私に王妃になれとおっしゃるなら、私は王妃としての仕事をしたい。その為の部下や理解です」

私には思惑があつた。一番のストレスは食事についてだったが、部屋の整えにしたつて手抜きと称すればいいのか、使う側に配慮のかけらも感じられない設<sup>しつぽ</sup>えで、未熟な私でも女将の鉄槌を食らわせたいところだつた。それを一から指導し、もてなしを教えるのも私にとっては業を成すことだ。「和楽屋」で出来ないならば、ここでやる事が私の人生を無駄にしない道だと思つたのだ。

それに反して王太子の顔は意地悪気に笑み、そんな事がお前に出るのかと言わんばかりだ。周りの三人は静かに成り行きを見守っている。金の王子が意識を緩める為に足を組み替えたくらいで、大詰め場面を必要以上に邪魔立てしない所は大人というよりも優れた人間性を感じさせるものだつた。

それから押し問答は続いた。女であれば着飾つて男に守られる方が良からうと言うものを、それだけじゃつまらないと押し返し、気まぐれに遊び半分じゃたまらんがという皮肉に、退屈を労働に回す方がよっぽど建設的だと主張した。延々と続きそうな勢いだつ

だが、白の老人の「そこまでじゃ」という鶴の一声で場は沈着。少しヒート気味だった私と銀の王太子はバツが悪そうに息を吐き出した。

ゴホンと咳払いを一つ、王太子は話題を変える。

「里帰りは認めよう、だが『神の瞬き』を扱う者は希少だ。現在は王族と極一部の者にしか扱えない力、頻繁というわけにはいかぬ。そして最後のお前を愛せよ。という条項だが……」

王太子はそこで言葉を切った。続きが浮かばないのか、言い辛いのか、そりゃ愛だのなんだのを男が語るには少々気恥ずかしいだろうし、プライドの高そうな男には苦行だろう。しかしお見合い結婚、政略結婚と言えど、形だけでも二人で幸せを築いていこうと言うべきではないか。

そんな結語を予想していた私は、次に続いた言葉に信じられない！ とつい叫んでしまった。

神の瞬きとかいう新たな単語に質問を浴びせるのも忘れて。

「多分、無理だ」

はああああああ？！

今までの緊張を強いられた舌戦に、疲れを感じていた私には決めの一手だったぞ。がくりと肩を落としたけども、それは振られたという様なほろ苦い思いからではなく、無理やり拉致プロポーズをしておいて社交辞令の一つ、か弱い女に見せる優しさの一つも持ち合わせない男なのかと落胆したからだ。

正直者と言えはそうだろう、私みたいな小生意気な女は様子からして始めて見るようだし、美醜に關しても彫りの深さで私なんて哀れな造形だと言われそうだ。　だけど、だけどねえ……”無理だ”　はないだろうその兄ちゃん！

敢えて何故かは聞きたくない（醜いなんぞ言われようなら五寸釘じゃ済ませない）、しかしもう私は限界だった。

腹の中では餓鬼みたいにぶーぶー文句をたれて、悪態を吐きまくっていたけども、なるべくなるべく穩便に対処してきたつもりだ。

（そうなのか？）　なのに先に崩したのはお前だ。

脱力が段々怒りに変わってきて、もう止められないところに来て達してしまった。

「あ、あんたねえ！　先に全て条件はのむぞ、みたいなでかい事言っておいて蓋を開ければ文句ばっか。　男のくせに二言が多いのよ！　私は仕事が好きだしそれでなんの迷惑がかかる！　女も働けば国力も上がる、”神、神”　って神様もお願いされてばっかじゃ自分らでやれよって腹もたつでしょうよ！　大体嫁に來いと言うなら最低限の誠意は見せたらどうなの？　こっちだつて昨日始めて会った男に媚売って傳かじくなんてまっぴらご免なのよ！　嫌なら早く戻せばいい、それでも私が神に選ばれたと言うならば、私の条件だつて神が許したもんでしようよ！」

あ、最後のは言いすぎた

やばいと思う間もなく、私の劍幕に白の老人がふふふと穩やかに声を漏らした。　他の音は場にすべて飲み込まれ、キーンと冬の朝の様な冷たい空気の音だけが支配していたように思う。　他の三人といえは放心し指先一つ動かす事も出来ない程だ。　既視感デジャヴ……。

お互いにそうなのだが、未知の生物との戦場ではしばし沈黙が流れ、硬直するという現象が起こる、これももう何度目か分からないので慣れてしまった。

よって唯一音のする白の老人へゆっくりと視線を移すと、うんうんと頷き優しい顔を向けられた。

その仏様の様なお顔を見て、嗚呼やってしまったと後悔の嵐が巻き起こる。

言いすぎだ、私の方こそ大きく出すぎではないか。主張というものは謙虚に出して大きな成果を挙げた時こそ効果を発揮すると、これまで大鬼ババ様を前に学んできたのではなかったか。興奮を抑える事も出来ずに大口を叩くなどたいがい愚の骨頂、修行足らずもいとこだ。

だが今更言い過ぎましたと訂正するのは癪だし、出来ない。後は開き直るか、誤魔化すか……。どちらも難しいことに思えた。

「神の意向か、言つな」

やっぱりそこを突くか、皮肉な男はどこまでも皮肉気だな。さつきまで呆気に取りられていたくせにもう嫌味の応酬か。無意識に顔が歪んでしまったではないか。

銀の髪を背中に払いのけ、のろのろと優雅そうな仕草で顎をささる様がまた苛立ちを掻きたてる。何を考えている？

ダメダメもう駄目だよ、自ら取ってくれと云わんばかりの足は二度と挙げてやるな、そう噛み殺して沈黙を貫いた。

次の一手、出来れば次で王手を取りたい、そればかりが頭を占める。そこにふと囁かれた言葉で引き戻された。

「いいだろう。お前の言う通りこちらが言いだした事だ、その自信を見せてもらうのも一興だろう。ただし最後の条項に関してはお前が導くがいい。我には先に二人の側妃がいる、丁重に扱いはしても愛など無縁であったからな。上手く導けば我もお前に愛を与えられるやもしれん」

「なんですと?! 既に二人もいてまだ欲しがるか! ただのすきものか!」

ついつい、また口から先に出てしまった。

向かいから金の王子のぶはつと噴出す声が漏れるが、当の王太子は眉間の皺をぐぐぐつと寄せ般若の面で睨み据えてきた。

「我が望んだ者などおらん」

「あ、そ、そうですか、それは失礼。ちょっと吃驚したもんでたんごぶ二つ。すでに折れそうですが、この話は保留としておこう。また墓穴を掘らない為に。」

「とにかく、交渉はこれで良いな。後はモングラントにでも聞けば良い、では、お前の出方を楽しみにしている」

それ楽しみにしてるって言う顔じゃないだろ。言うだけ言ってさっさと引き上げようとする王太子を慌てて呼び止める。

大事な事をまだ言っただけだ。

「ちょっと待って下さい、条件についてはそれで分かりました。

(不本意ですが) ただ条件の前に、私の大鬼ババ、いえ祖母に許

しを請わねばなりません」

何を今更と怪訝な顔をする彼等に、それはそれは恐ろしい鬼なんだと体全体で表して見せた。

無視しようなんて事をすれば、生涯安らかな眠りを与えられる事はなく、その苦しさに死ぬ事すらも許されぬ、そして例え鬼が死んだとて毎夜夢枕にまでも追い立てられ、許して下さいと泣き叫ぶ日々になるだろうと。語りつくせぬが、そんなじよそこの呪いや殺人鬼よりもよっぽど恐ろしい鬼なんだと涙ながらに語ってやった。

(嘘泣きですが！)

すると黙って聞いた全員が息を呑み、盛大に顔を引き攣らせた形で固まった。完全に引いているのだが……。

私はやっと満足げに、そうだろそうだろ分かるよその気持ちと揚々と頷いて見せたのだ。

神が勝つか、鬼が勝つか、それはまだ誰も知らない。

5：沈黙・硬直これ基本（後書き）

序章ながいね・・・これは序章って言えるのかね・・・  
ずっと主人公心情に重きを置きすぎ？って気もするんですが、この  
段階が一区切りつきましたら、周りや男性陣の様子なんかもつと  
織り交ぜて書きます。

## 6： 鬼退治には武器より防具を

何故こうなってしまったか

現在、私は愛すべき旅館「和楽屋」の奥座敷、大鬼の巣窟とも言うべき祖母の居間にて齒を食いしばっている。

私の前方には応接セットのソファーに腰掛けた王太子と仙人、対面には大鬼ババこと、大女将である私の祖母が静かに目を閉じていた。（怖い！）

祖母のすぐ近くでは畳に控える”妹・美琴”の姿があり、そしてその大分後方、縁側との境である段差三センチの敷居の上に私、という陣形だ。

客の手前、庭のとがった敷石の上じゃなかったただけ救いはあった。

王太子らはお客宜しく悠然としているが、まあそれも今の内だ。

先に大鬼が自ら上座についたことで彼等の末路も既に決まっている。そう、地獄の業火に巻かれる事は確定なのだ。

敷居の上でグラグラと揺れながらざまあみろと言いたくなるが、さすがに憐憫の情は感じる。ここは一つご愁傷様という事で。（他人事ではないけどな）

\*\*\*

事は少しさかのぼる。

私の大鬼退治、いやいや祖母の許しをとの発言から二日程対策会

議が行われた。

王国側は平民に頭を下げるべきではないとか、放っておけば良いとか、危険すぎるとか（これが一番的を得てるな） はたまた神の縁者に礼節は欠かせぬとか色んな意見が出たらしいが、結局私が「絶対だ」と言ったので渋々承諾するという形になったそうだ。

それから必然的に誰が行くかという話になる。私は一人で帰るつもりでいたからこんな話になっているなど露にも思わなかったが、あーでもないこーでもないの末、王太子と白の老人が選ばれたようだ。

王太子に関しては最後まで皆が反対を示したらしいが、当の本人が「夫になるのは我だ」と至極<sup>もつと</sup>尤もな意見で黙らせたとか。

銀の王子よ、己は間抜けか……

未知の世界につられおつて、地獄を舐めてかかるとはなんと悲哀れ。

ただの怖いもの見たさでは済まなかったと、夜中トイレに行けなくなっても知らないからな。

余談にはなるが、会議には参加させてもらえなかった私は二日という暇を持て余し、部屋中の調度品を新品同様ビカビカに磨いてやった。

いいストレス発散にはなったな。 本当に余談だ。

そして、出発するまでにはまた一悶着あった。

帯剣が当たり前の生物達にとって「置いていけ」という私の進言は、馬鹿も休み休み言えと呆れかえるものだったらしい。それを噛み砕いて「捕まるぞ」と呆れ返して説明するなど、本当骨の折れる作業だ。 だから私一人で帰ると言ったのに。

だがまた長々と会議に発展しそうになったので、仕方なく脇差<sup>わきさし</sup>の

様な小振りな短剣を認めることで決着した。これなら警棒でごまかせ……ないが、苦肉の策だ。

心中では”本当に殺られるなら遠くからズドンで終わりだ”と呟いていたが、また面倒くさくなるので言わずにとどめた。

やっとの事で出発と相成る。来た時と同様岩に包まれ数人の神殿スタッフ（彼等は王族らしいが）の呪文を受けて、一瞬の後は我が家へ辿りついていった。今度は何故か庭先に到着していたが、大して気にもとめなかった。

あゝ帰ってこれたという感慨も一入。

さっそく私が帰還の旨を伝えようと中庭の上がりに足をかけたところで、妹の絶叫に出迎えられた。

それは心配したというような心温まる歡喜の雄叫びではなく、間違はなく「大鬼の瘴気をどうするつもりだ」と言いたげな涙目だ。

そこで私は我にかえる。間抜けどもと剣の一本や二本でごちゃごちゃ言ってる場合ではなかったと。

かくして罪人の如く頂垂れた私と、興味深げなキヨロキヨロ王子、始終微笑みを絶やさない大物仙人の三人は、妹の手によって鬼の巢窟に連行されていったのでした。そうして冒頭に戻るといっわけです。

\*\*\*

息をするのも憚られる室内の静寂。

既に私の脛には二本のレールが深く刻まれているが、身じろぎしようなものなら噛み殺されると本能が察知しているので、じっと奥歯を噛締める。

その鬼の間を破るのは、勿論鬼でなくてはならない。

「藤華 『は、はいっ！』 この二日、御客様をほったらかして何を」

二日？ 私が拉致されて四日目だと思っただけど、そんな事は今はどうでもいいか。

「あの…… 大女将、私は連れ去ら 『何を』 は、はい、御前の方の国におりました」

おい王子出番だろ、お前が説明しろ！

鋭い目を男に向けるが、そいつは飄々と茶を啜りやがった。この役立たず！

大鬼はそれからゆっくりと目の前の男二人を見て、また黙って目を閉じた。 ロックオン完了だ。

それを間近で見っていた妹はすでに正座した腰元から震えている。平時の大鬼であれば、大音量の怒声で雷を撒き散らす、それは鬼から見れば愛情たっぷりいかすちの教育だ。（それも十分恐ろしい） しかし今回は久々に有事と認識なさってるもようで、静かな導入がそこはかとなく恐怖を掻きたてる。

私はどう切り出すべきか考えたいけど、大量の瘴氣あに中てられ思考が纏まらない。 ただ青白い顔を俯けるしかなかった。

それは状況を見かねた仙人が声を発すまで、かなりの時間を要したと思う。

「此度はこちらの非礼をお詫びすると共に、愛孫君で在られるフジカ様を我が国の王妃にお迎えしたいと、その旨お許しを請いに参上

致しました」

ピクリと同時に妹と私が揺れる。妹の心情を測れば「何刺激してんだこのボケ爺」<sup>いじ</sup>だろう。突飛な戯言に呆れと怒りを滲ませてるが、それは全てこれ以上大鬼が牙を剥くのを恐れるからだ。

本質的にそこじゃないと思うが、誰に似たのか可愛い妹よ、お前も道連れだ。どうか私と一緒にこの惨状（漫画な現実）を切り抜けてくれ。

果たして大鬼は返答も相槌もないままだが、説明を続けると暗に語っているようだったので、勇気を振り絞って掠れ声のままにこれまでの経緯を聞かせた。

また鬼の間が訪れたが、今回は然程続かなかった。（安堵する余裕はないがな！）

「藤華、身の程という教え忘れおったか」

きた！ 矛先は私からか…… と思ったが、その前にこの奇奇怪怪な話に全く動じた様子も見せず、嘘だと疑ってくる事もしないなんて。何故ですか大鬼ババ様！

鬼にとってはこれも他愛もない事なのだろうかと本気で怪しみそうになる。

「いいえ。私共は、お百姓様が血を流し<sup>い</sup>拵え 『丹精込めて』

は、はい。丹精込めて拵えて下さった作物を頂戴しておいて、商売を成す様な下俗な民に御座います」

何度も何度も、己が折れ枯れ果てるまで、自尊心のカスすら奪われるほど言わされ続けた言でございます。忘れるはずは御座いません。

「そのお前が御国に立つと言っか」

ノー！ 血走った目が怖すぎます！

「の……ぞんでる訳じゃありません。ですが、あちらも神様が  
おっしゃったと」

ピシャンツ！ と、机を猛打する音があった。

ギヤアア！ 大鬼ババ様〜、私被害者なんですってば。とは  
口が裂けても言えない。

かくなる上は神様を持ち出すしかないと思っていた私にとって、  
それを出した途端の衝撃に泣くに泣けない状態だ。

「どこまで面の皮が厚い。館の御客様も満足にもてなせない戯け  
者が、恐れ多くも御神様の御遣いの様に振舞うなど、和楽家最大の  
恥かと承知か。血迷うな」

な、涙が出そうです。お許し下さい。お許し下さい。

「申し訳御座いません……」

大鬼は私が平伏すのを目の端に納めると、ターゲットを一時前方  
に移す事としたみたいだ。

ギロリという効果音がここまで届く。大鬼の周囲は今迄黒かつ  
た炎が、膨大な赤へと変化し敵対する様をはつきりと見せ付けてい

る。(御武運を！)

それまで哀れな視線を私に向けていた王太子は、その変化に多少身構え目立たぬよう上背を伸ばした。それにこれまで見た事もなかった愛想を全面に押し出し、あちらも武装を整えた事が窺えた。

「異国の御上だそうですが、手前の大事な孫娘を攫ったと」

いつの時代だよ！ 御上もそうだけど、異国って訳でもないからね！

「それについては申し訳ない。こちらも召還するより手立てがなかった」

少し表情を崩し眉根を下げて見せるが、そんなものが通用する筈がない。案の定大鬼は毛筋の一つも動かさない。

なるべくじつとしてるのが身の為、その愛想笑いはさつさと引つ込めた方が懸命だ。何故か庇おうとしている自分がいたが、これは単なる情け、ただの「塩」だ。

「黙られよ。愚かであってもこの娘は我が家の大事な長子、目の届かぬ天上へおめおめ差し出すとお思いか」

「かっこいい…… かもしれない、ばあちゃん！ (呼んだことないけどね)」

当たり前前にも大事だと言われた事に涙腺が緩むよ、愚かでも。

「ましてや御上になるなぞ出来の良い器は持たぬ。戯れたと今一度反省なさるがいい」

言い終わった後にはゴオーっという炎の勢いだけが増していた。

やっぱり前言は撤回します。

鬼はあくまで鬼でした。

6 : 鬼退治には武器より防具を（後書き）

お祖母様、藤華、美琴、彼女達の血はある意味争えない。



手で顔を覆ってしまった。

大鬼様は 若干炎は弱まったようだが、視線は厳しいままだ。すると続いて仙人が背凭せもたれから体を起こし、嬉々と後押しに入った。辺りは朗らかな気配がふうわりと漂い始め、鬼の炎と瘴気を少しずつ霧散させている。

絶妙な連携は敵ながらあっぱれ。

「王子殿下が申す通り、フジカ様には私めも魅力を感じておりましてな。祖母殿のご心配なさる気持ちも重々お察しするが、どうか我が国にお預け下さらぬじゃろうか。なに、この恐ろしさあに中てられては、必ずや王子が幸せに致しましょうぞ」

ふっ、と鬼が笑った。 笑った?! (当然の二度見)

「ああ、勿論だ。 こちらの里にもたまに王太子だろうか、是非ともお許し願いたい」

にこつと笑うあの銀の男は本当に王太子だろうか。

それにふつと笑いをこぼしたのも本当に大鬼ババ様だったのだろうか。

ぎよつとする、そりゃぎよつともするし逆にと勘ぐりもしますよ。こんな事は始めてで妹も目を白黒させている。私だって信じられない状況だ。

仙人がどれだけ凄かろうとも、こんな流れはありえない……。

きつともうすぐ第二波が と色んな意味で怯えている私を他所に、新たな展開は刻々続いていたらしい。



三人の去った中で、大鬼ババ様は私の方へ視線を向けた。表情は穏やかに屈んでいるが目の奥が大時化もよう。うねる大波が今にも押し寄せそうで、何を含まんとしている？ と体に緊張が走った。

「周りはその坊主のような小賢しい連中ばかりぞ」

「え？ ……はい」

「教えは忘れるな」

「はい」 （はい？）

それだけ言って大鬼ババ様は私を解放した。

一人座敷に取り残された私は暫く茫然としていたけれど、次第にだんだんと記憶を辿っていく。

本当にもう後には引けなくなった

どうしてこうなってしまったのだろう

往生際が悪いのは分かっているが、今更何故なんだと感じてならない。大鬼ババ様の真意も読めない。この件に関して納得しているとは到底思えないし、途中までは聞く耳すら持たなかったはずなのに何故おれてみせた？ まさか私を送り込み、それを通じてカニの国を支配する気か？ いやそうする意味が分からない。ならば仙人に惚れた？ それこそありえない…… って馬鹿なのか、私は。

考えても分からないことは、考えるのをやめるべきだが。

そこでふと黄昏てしまう。

痛いはずの脛のレー尔痕を撫でながら、縁側から続く庭の景色を見るともなしに眺めていた。

ここは大女将の為の庭だ。表とは隔された美しい竹垣で囲まれ、初夏らしい背の低い緑が綺麗に剪定されている。あの敷石の中央にある石灯籠もずっと昔からここにあるのに、角が丸く浸食されても尚その存在は変わらず頼もしい。ここから消えるのか。「寂しいかも……」なんて呟いてみた。

\*\*\*

着物を着替えなおしてカニの国の御客様の元へ向かった。

部屋に入ると、和室に慣れない二人が、慣れない座椅子に胡坐をかいてテーブルを挟んでいる。借りてきた猫の様でちょっと面白い画でもあった。しかも堅苦しい正装のままではさぞ窮屈だろうに、上着も脱いでないところを見ると未だ緊張を解いていないのか。

「どうぞ」

表の館内に入れば自然と女将の本能が体と心を動かす。日本茶は苦手かもしれない彼等にと、持参した紅茶をテーブルに並べ、奥から浴衣を取り出した。

今は一時休戦、お客様には気持ちの良いおもてなしを。自分にもそう言い聞かせた。

「それは夜着か？」

興味を示す王太子はちょっと生意気な子供のようで、私もつい、つられて微笑ましくなってしまう。

「そうですね。こちらに着替えてゆつくりなさって下さい」  
着かたが分からないと言う王太子を立たせて、服の上から軽く羽織らせ帯を結んで見せた。

だがそれから延々異文化交流の難しさというか、面倒くささを存分に味わうことになる。

(その話はまた機会があればお話する)

「そんなことより、お前の祖母は明日何を言うつもりだ」  
いきなり声のトーンを落として本題を持ち出す王太子、その変わり身の横柄態度にまたカチンときてしまった。

「知りませんよ。鬼の考えが読める人間なんているわけないでしょう。それにさっきのは何ですか？ 祖母の前ではかなり優等生で胡散臭い婿振りでしたね」

乙女心を弄び、家族を欺いた報いが、嫌味の一つなら安いもんだ。

「だが、了承は取り付けたようだ。 案外」

びしっと私の体が固まった。 それに気付いて王太子も途中で言葉をきる。

一瞬傷ついた顔をしてしまったのか、横から仙人の気遣うような王子を咎める声が聞こえて、慌てて表面を取り繕った。

自分では、そこまで感傷的ではないつもりでいたけど、やっぱり違うのか。 崩れる程ではなくても、捨てられるような悲しさと寂しさ、心細さを感じているのかもしれない。

一度は諦めた事だし、ここで言っても詮無いことだが。

それにしても本当にデリカシーのない男だ。こんな男と夫婦と  
してうまくやっていけるのか。 いけないな、きつと。

「とりあえず明日ですね。私も今日は休みますので」

そう言い残して部屋から退散した。憎からず二人のこの後が気  
になったり、今は顔を合わせていたくなかったり、妙な心持だっ  
たが自分も落ち着けなくてはならない。今日は早めに自分の部屋に  
戻って、頭の中を整理しよう。そして、粗方荷物も纏めよう……。

忘れそうになった深夜には妹の襲撃にもあつた。予想通り、消  
えた瞬間からの事を全て説明させられ、その後、根掘り葉掘り質問  
攻めという併せ攻撃を受けた。それでも「本当に行くの？」とい  
う話になると、ちよつとしんみり寂しそうに見えたが、次の瞬間に  
は「自分だけイケメン王に、王妃?!」と掴みかかってきやがった。  
夢見がちな妹よ、姉ちゃんはお前が羨ましい。

「和楽屋」の後を託して深夜の珍姉妹談義を終了させた。

\*\*\*

そして、運命の朝が明けた。

前日とは違って、宴会用の大広間に集められた私達と、「和楽屋」  
の従業員一同。その中には勿論力二の国の両名も含まれている。

朝礼と同じ様に従業員達が整列をして、ステージの壇上には大鬼  
ババ様と、王太子、仙人が並んだ。私と妹は大鬼の後ろに控えさ

せられている。

皆が皆、緊張を隠せない状態ではあったが、鬼の決意はすでに固まっているらしく、早々と従業員達に今回の騒動を説明し、カニの二人を紹介し終えてしまった。

しん、と再び静まり返る。そして衝撃の沙汰が下った。

「藤華が嫁ぐことを許す」

うつと唸ったのは私だ。だが、これだけでは終わらなかった。

「代わりに美琴の婿は貰い受ける。二年後、わしが自ら選定し連れ帰る。その為の迎えを寄越されよ」

「 なっ! 」

「 えええええええ! 」

「 嘘お……っ 」

王太子、妹、私、と三様の驚愕ぶり。

しかし、いち早く立ち直った王太子は、仙人とわずか目で会話を交わし、ふうーと盛大に溜息でもって締めくくった。

「 よろしかろう。 国に戻り協議にはなるうが、なんとか候補者を絞るところまではさせて頂く 」

でも締めくくれなかった。

「 では証文の代わりに、その銀の髪を頂戴する 」

そう言うやいなや、大鬼は王太子の背中をくるりと回し、袂の中たもとから取出した花鉞でじゃくじゃくと銀髪を切り取った。それはほんの一瞬の出来事で、誰にも止められず、足を一步踏み出すことも出来なかった。

あの、きらきらと輝き揺れる腰まで届いていた銀の髪。それが今は肩の辺りで儂く無残な切り口を晒していた。

嗚呼、絶対厄介なことになる。間違いなく災難だ。

抜け殻になったままの王太子と、今後の憂いを胸いっぱい抱えた私を連れて、やはり最強の強者仙人は遠いカニムーチヨ王国へと帰還を開始した。

7： 最終勝者は誰だ（後書き）

いつもより少し長くなってしまいました、でも切るに切れず綺麗に纏められませんでした。 うっとおしかったらごめんなチャイ。

8 : さあ！カニの国（前書き）

8： さあ！カニの国

カニムーチョ王国へ赴いてから、一月が経った。

あの大鬼の沙汰を受けて帰還した際には、金の王子を始めとする神官達が一番の騒ぎをみせた。「銀の御髪が！」とおいおい嘆いて、神に祈りを捧げる始末。また生えるだろうに、大袈裟な。

役職を持つ貴族達にしても、高らかに祖母に対する非難を口にする者もいたが、それはなんとというか国や王太子の威信というより、とりあえず王太子のご機嫌をとっておこうというのがみえみえの媚、各々の保身に近いものだったろう。

実際、権力大好き貴族にとっては、娘を王妃に差し出したくともせいぜい側室止まりなんだから、あの銀の髪は有難くもなんともない。それをさも残念そうに「神から賜れし銀を」などと白々しい。

中にはずる賢く「黒の姫」の擁護に回る者もいたが、どれも見え透いた諂<sup>へつ</sup>いが多分に含まれていた。戦を起こして家の潰しあいをする人達だからね……。それがなくなった今では、違う戦略をあれやこれやと模索中なんだろう。是非、その知恵を別に使って頂きたい。良い人もいるんだろうけど。

だが、危惧していた程の災難には見舞われなかった。（断罪されて拷問も想像したけどね！）

王太子も自分があっさりぬかった事を言う訳にはいかなかったみたいだし、真実を知る三人が口裏を合わせて、それっぽく話を纏めたのだ。それにより現王や王妃からも一切お咎めはなし。ちよつと拍子抜けするくらいで、詰まる所銀の髪型なんてどうでもいいんじゃないの？と思っただ程だった。

そして、もう一つ城を騒がせたのは、私の嫁入り道具。

突然の嫁入り宣言でそんな物がある事自体私も驚いたが、帰還の支度を終え裏庭に足を運んだ時には、もうその荷が山と積んであった。味噌が樽ごと、醤油や味りんが数ケース、米乾物諸々のダンボールが数十箱と。

半日足らず、たった一晚でこれだけの物を。しかも朝一に全て届けさせるとは、祖母はやはり恐ろし、いやいや偉大だった。

ずっと懇意にしている取引先だけど、近所の隣町というような近場の蔵元や問屋ではない。一流料亭や老舗料理店、名立たる顧客を抱えた有名店に、物凄いごり押しで一晩中運ばせたのが容易に想像出来る。怖いね、大鬼ババ様！ お見事……。

この嫁入り道具（？）桐箆笥や内掛けよりよっぽど有難かった。こうして一月過ごしてみても、慣れ親しんだ味が支えになってるのは確実だから。大女将有難う御座います。

それからの私は、一に勉強、二に勉強の暮らしを送っている。

言葉は始めからなんの問題もなくしゃべれるし、読み物も意識して見ればこちらの書体だが、何故か頭には日本語に変換され読む事が出来た。しかし書く事が出来ない。”あいうえお表”の様な物と見比べながら毎日夜の時間は書き取りの練習に費やした。

そして、昼間はこちらの生活の基本を習っている。その先生が金の王子ことソルニード殿下。彼は王族であり神官長でもあるので、王族の歴史は基より、神話の類から儀式の意味合いなど神に関する幅広い知識を有している。他にも民間人の葬儀を受け持つ神殿の長ゆえに、多くの民の暮らしぶりや流行にも詳しくかった。

勉強は昔から実利に沿ったものだったので、ここに来てそれもそれは変わらず、とても楽しく学べている。

これからの私の仕事、あらゆる意識改革を行うという壮大な目標の為には、何がなくとも己が知らずではお話しにもならないのだから。

その点で言えば、彼は私の教師役に適任だった。ある一点を除けば。

「キツポ、そろそろ調理場へ行くから、ソルンの護衛に連絡お願い」

キツポと呼ぶのは、私に始めて出来た戦友。 ”キツポガウス・アーノ・サンティン” 伯爵家の次男坊で私についてくれた侍従の一人。そして栄えある「黒妃室」のメンバー第一号である。

「黒妃室」とは、私の直轄部隊のことを、暫定的な通称でそう呼んでいる。（形から入るのも大切！）

そんな彼は赤茶の髪を一つに括り、きびきびとした態度とまあるい目がアンバランスな二十歳の青年だ。侍従になるには少し家柄良すぎの彼が、何故か私になついてくれて、気付けば忠誠を誓われていた。今では私の命令に従う事に喜びを感じるところか熱血漢？ 一歩間違えば暑苦しい男だが、私はこの手の男性に慣れているし好感が持てる。このタイプの情の厚さを見込んで、仕事の他にも相談事が出来る友達になった。

さて、キツポの熱い愛嬌とは別に、同じ愛嬌でも、こちらのどこかいやらしい俗物的な笑顔を向ける金の王子だが……。

「姉上は冷たいなあ。 僕も姉上の作った食事を一緒にしたいのに」

「わざとらしく姉上と言うのはやめて。 何が冷たいよ、しょっちゅう居座ってるくせに。 たまには自分の奥さん達と食事したらど

うなの？」

そうなのだ。ソルンとはソルニアードの事で、授業が終わってもなかなか帰らない。長のくせに仕事はないのか！

「兄上と二人より、僕がいた方がいいんじゃない？」

う……。確かに王太子と私は、既に新居というべき離宮に身を置いてる。婚礼式も終わらない内から。

その離宮には当然広い調理場が完備されているので、約束通りそこをもらい、私は毎日食事を作る。そして昼食を除く朝晩の食事を王太子と共にしているのだ。

共に食事をするといっても、仲良く団欒や歓談という事じゃない……。一言もしゃべらない日もあれば、たまに二、三質問してやる事もある。そんな葬式みたいな食事がしたいなら、一人で食べればいいのと思わないこともない。

その中でいかに王太子が無愛想だとしても、時折ぼろりと笑みをこぼす事がある。私にはではなく皿に向かってむふつというムツツリな笑み。

それを始めてソルンが見てからというもの、面白がって同席したがるのだ。

私は怖くてつつこめなかったが……。

「いても、いなくても一緒よ」

けんもほろろに切り捨てる。ソルンの明るさは和ませてくれるのも事実だが、二人の微妙な空気を面白がれるのはなんとなく気分が悪い。授業の時に聞く上手い冗談も、ここで聞けば変な煽りやからかいに変わるから性質が悪い。諸々の結果、招かざる客という認識で問題ない。

「ひどいなあ、フジカ。 まあその内ね」  
恋人に向けるような甘いウインクを残して、ソルンは護衛と引き上げていった。

「おえー。 さあ！ キツポ、参ろうか！」

「はい！ フジカ様！」

元気のいいキツポの声を聞きながら、二人調理場へ向かった。  
夕方からは、もう一つのお仕事。 城の料理人達に少しずつ料理を教えている。

離宮に来た当初、この調理場に配属されてきたのは四名。 彼等にはきちんと話を通っていたらしく、私の仕事（飯の支度）に驚きはしても、何も言わず従ってくれた。 数日が経った頃には好奇心に負けて、向こうから教えを請うてくれたので、しめしめと思ったのは秘密だ。

それからというものの噂を聞きつけては（ソルンの仕業だが）、王の調理場から、迎賓館の調理場から、文部、軍部の調理場からと料理人達が押しかけて来て「我々にもどうか」と頼まれ、教える対象が広がった。

新しい味や見栄え、調理法、繊細な下ごしらえなど彼等を刺激するものは多かつたはずだ。 その気持ちは良く分かる。 現在は選抜二十名程が私の生徒で、各調理場の精鋭達。 その内数名はすでにこの離宮に引き抜き済みだ。 （ん？セコくてもこれくらい許せ！）

私も胸を張って弟子を取るには未熟だし抵抗もあるが、ここの食文化に貢献出来るなら恥もやぶさかではない。 年上でキャリアの

長い料理人に対しても、再度衛生管理の面から、包丁研ぎからと、新弟子のように扱っている。それでも文句も言わず、いざ仕込みを始めると食い入るようにメモを取り、質問を投げ、やらせてくれと積極性を見せるところは本当に素晴らしいと思う。

それと同時に、これまでなんでこうじゃなかったんだろうと不思議でたまらない。こんなに貪欲なのに、今まで新しいメニューや味の追求を何故しなかった？　そこが今ひとつ活気が足りない要因なんだろうなあ。ここから、いい影響が少しでも広がるといいが……。

「よし。じゃあ次、魚の下ろし方見せるよ！」

「……………はい！　親方！！」「……………」

彼等はリーダーと言っているんだが、そのどすの聞いた極太声では、「親方」にしか聞こえない。お願いだから、その呼び名やめろってば。

8： さあ！カニの国（後書き）

カニムーチョ王国の生活が始まりました。

まだ序盤ですが、良かったらこれからもお付き合い下さい。

少しずつ色々出てくると思います。（\* ^ - ^ ）

## 9： 藪は突っついてなんぼ

ぼーんやりと朝の身支度を整える。整えるといっても顔を洗って化粧をし、動きやすい調理着に着替えたら終了。

準備が出来たらすぐさま調理場へ向かうのが私の毎日の生活だ。

そしてジョイニが降りてきたら朝食。

そこで今日はお願いをしなければ。

ああ、ジョイニとは王太子ジョジウラーニの事で、長いからそう呼ぶと勝手に押しつけた呼び名です。言うまでも無いが勿論部屋は別々だし、必要以上はお互いに近づいてはいない。無視しているわけでもないんだけど。

この離宮に移ってから、私には直接お世話をしてくれる人が六名いる。男性の侍従が四名と、女性が二名。侍女という名目らしいが……彼女ら、朝は自宅で悠々と朝食を済ませこの離宮にやってくる。日本的に言えば、十一時を過ぎた辺りでひよっこり顔出す重役出勤というもの。それで来たはいいが、掃除をするでも用事を聞いてくるでもない。何しに来たんだ？ と単純に問えば「フジカ様のお相手に」と。

それは別に彼女達だから悪いと言うわけではない。こちらの常識として、貴族のお嬢さんが十五から二十の間に二、三年城に上がり、王族その他身分の高い者の傍について、お茶やお話し相手をするのが侍女の仕事とされているからだ。要は女性版兵役、花嫁修業というやつ。私に言わせればそんなものは修行にもならんし侍女とも呼べない。だが、現状ギャンギャン怒鳴りつけるわけにもいかない。

この一月の間できちんと話をしてみれば、とても素直な良い娘達で、私が頼めば色々と手伝ってくれたりもする。私から見ても

もな仕事をさせるには、もう少し体制を整えねばなるまい。まあ見込みは十分だ。

「おはよう、ジョイニ。座って」  
「いかん、不必要に笑ってしまった。」

「……。ああ。なんだ朝から」  
ぬ！ 良からぬことの勘だけはいいな。

「ちよつと、お願いがあつてね。（ギロリと見るな） 今日午後からの勉強が休みな。それで” 第一回黒妃室会議” やりたいんだけど。私に回してくれる人材が決まっていれば、会わせて欲しいなと思つて」

私の部下をとつう約束は、現在の所、従者の中からはキツポ。調理場からはコウルという三十代後半の男性を自分で選抜した。コウルは調理場に始めから配属された内の一人で、性格も温厚、私と料理人達を上手く繋いでくれる右腕だ。他にもジョイニには文官を三名程寄せと願ひ出ている……けれど、まだうんともすんとも言つてこないのが現状。そこをそろそろ突つきたい。

「まだだ」

「は？ まだ決めてないつてこと？」

「ああ。何の為の会議だ？」

「……………。ふう〜。もう一月経つたのよ？」

使えん奴とぼそりと言ったら聞こえたようだ。 まあ聞こえるように言ったんだけど。

本当に、もう一月だぞ！ 短いと言えば短いし、式も終わってないと言えば、そうなんだが、のんびり構えてなし崩しにされても困る。

「だから会議の議題を言え」  
もの凄く機嫌を悪くしながら、睨んでくる。

「侍女の処遇についてね。 どの辺りまで可能か相談したいの」  
無論、さわりしか伝えない。 ここで却下をくれば水の泡だから。

「だったら夜聞いてやる。 それまでに希望を纏めておけ」

「いや、それはいいわ。 あ！ そうだ！ じゃあ私が直接スカウトに行く。 財務と行政、執行に関する人がいいから仕事場見て周ってもいいかしら？」

駄目だと分かって言ってるんだけど、気付く よね？

珍しく不満なら自分が聞いてやると寛大な気持ちで言ってくれたのか、それとも面倒臭い事を言われる前に先手を打ったのかは分からないが、多分後者だろうな。 でも、生憎それはいらん。 むしろそれ避けなんだし。 瞳の攻防戦が続いた後、ジョイニは舌打ちした。

「 お前は！ ……………分かった。 近い内に人選して知らせる」

よし！ テーブルの下でガッツポーズ。 なんか青筋がピツピと脈打っていて、とっても悔しそうなんだけど、どうせ腹の中で生意



バー三名全員離宮だし、実績もないのに悪目立ちだけしては益はないので。

そこで私達三名は「第一回黒妃室会議」を進行中です。

「そうですねえ、侍女女性がフジカ様の御身回りのお世話をというのは分かります。ですが調理場には必要ですか？」

コウルはやや眉を顰めて思案顔を浮かべる。私の理念（女性の社会進出）は前々から伝えてあつて、それには甚く賛同してくれた革新的な第二の友人メンバーが彼だ。

しかし、料理人達の革命は始まったばかり。そこで王太子や私に最高の料理をと奮起する彼等は、職人魂を今最高に輝かせている時で、女手がなくなつてやれる、いや足手まといなら邪魔だけはしてくれるというのが本音だろう。それも重々分かるんだけど。

「それなら、御身の回りだつて、私共がきちんとお世話させていただきますー！」

キツポも自分の管轄は誇りを持って主張しだした。だーからー！

「ちつがーうー！ 違つたよ、全然。貴方達に不備があるなんてこれっぽっちも思つてないわ。 だけどね、これまでになかった”女性が給金をもらえる” という事が大事なの。 そのお仕事としての一歩が私の周りからというだけよ。 来月、私は王妃になる。そして王妃の周りには賃金を自ら稼げる女達がいる。 その意味するところはかなり大きいと思うの。 分かつてくれる？」

「……では、他に洗濯や掃除を受け持つ仕事では駄目なのですか？」

「それも追々雇い入れるつもりよ。暫くは侍女に掃除もさせるけど」

私も大概傲慢かしら……。こんな言い方じゃジヨイ二のことも言えないわ。ちよつと自嘲しながら苦笑を隠した。

「キツポ、コウル、私が貴方達二人を ” 黒妃室 ” に迎えたのはその為よ。キツポには私の下もとでしつかり侍女達を指導して欲しいし、女性を指揮する事を学んで欲しい。コウルにも同じ事が言えるけど、調理場では皿洗いからで構わないわ、仲間と仕事をする楽しみを教えてあげてほしいの。私は自分の目を信じてる、二人は私の期待に応えてくれると確信してるから」

ちよつと芝居がかった言い回しにはなつたが、これは紛れもなく私の本心。人を動かすというのは楽じゃないし、労働をしたことのない人間相手、ましてや異性になると余計な気を使わないといけなかつたり、難しい事がてんこ盛りだ。雇つてただ仕事を与えるのではなく、目をかけてやれる上役が必ず必要になる。それが目下は彼等であつても、将来は城中で働く女性達の新しいリーダー役を彼等に育てて欲しい。

二人は続く私の訴えに、それぞれ胸元を握り締めたり、瞼を閉じてみたりと何かを感じてくれたようだった。

「はいっ！ フジカ様！」

「……っフジカ様！」

あ、やばい。二人揃つて返事をしてきた。

熱い男キツポは、まあ分かるが、コウルまでもがちよつと興奮し

ている。大の男が二人して涙目になるんじゃない。コウル、お前はそんなキャラじゃないだろ。濃紫の短髪に切れ長の涼やかな目元が強面を演出しているのに（実際は子煩悩で人が良すぎる程の穏健派だが）、キツポと同調してどうする。

「だからね、力を貸して欲しいんだけど、私達だけじゃ全然駄目だわ。もっと仲間がいる。キツポは誰か心当たりない？」  
貴族であるキツポには城の人脈も少しはあるだろう。そう踏んでの問いかけだった。

「私の兄の幼馴染に財務を担当している者がおります。彼は信頼出来るし、優秀だと言われています。ただ……」

言いにくい事があるらしいキツポに構わないからと、先を促した。

「ただ、厳しい家なので、フジカ様女性の下で働く事を良しとするかは私にも分かりません」

「ああ、そんな事なら想定済みよ。そう その人には当たってみる価値があるかもね」

申し訳なさそうに搾り出したキツポに、なんでもない口調で告げた。

「うふふと知らず不気味な笑いが漏れてしまったらしい。二人が一瞬背を引いたのが上目で見えた。」

「あの……フジカ様」

今度は、こちらも言い辛そうにコウルが濁す。

「どうしたの？」と顔を戻して聞く体勢をとった。

そして、彼から出た提案は、私の心臓をこれでもかというほど高

ぶらせるものだった。

「私の妻では駄目でしょうか？」

嗚呼〜！ その手があつた〜！

コウルの妻なら、身元は保証される。調理場の中でも、夫や私の空気を読む事も容易に出来るだろう。他にも子供に手のかからなくなつた奥さんがいるかもしれない。うん、いいかもしれない！

「コウル！ いい！ それ良いよ！ 全然思いつかなかつたわ。よしっ、コウルは奥さんに打診してみて。キッポはその幼馴染の背景を出来るだけ詳しく纏めて私に提出して」

「はい！」

こうして初の会合は幕を閉じた。

まだ具体的には何も進展してはいないが、細く仄かな光明だけは一筋見えたかもしれない。一人で焦っていたので、少し単純すぎるかな。でもこういう危ない綱渡りな性格が自分では気にいつている。大胆なだけで終わらないように、大鬼ババ様の顔でも思い出しておこう！

(ぎゃあああっ！)



9： 藪は突っついてなんぼ（後書き）

ぐううう、纏める作業に途中断念してしまいました。

これは、もう諦めるべきか。

さて、焦りだけが先行しているフジカですが、ここからも一進一退の日々が続くのでしょうか。

## 10：ダンディーの策か

ふいふ。カニムーチョ王国へ来てからというものの、まともな休みどころか、この離宮の中から出たのも数回程度だなあ。そろそろ腐りかけていたので、外の風が気持ちいい。庭師の後に続きながら久しぶりの開放感に浸っていた。

それでも建物の敷地面積はかなり広いので、息が詰まるということはないんだけど。

この離宮は「く」の字型に、地下一階、地上三階建ての構造で出ている。

二階まで吹き抜けの玄関ホールを抜けると、左翼側に来客用の応接間が四部屋並び、その向かいには控えの間が六部屋ほど用意されている。右翼側には護衛騎士の控え室と、大ホール。

玄関ホールをぐるりと奥手に周ると二階へ続く階段が伸び、左翼側に客室、右翼側が調理場や食堂、使用人達の控え室が据えられている。

そして三階左翼側は王太子の領域で、私室に書斎、個人的な客を迎える応接間、側近の控え室などなど、他にも衣装部屋や何に使うか分からない部屋がいくつもあるみたいだ。

その反対右翼側が私に割り当てられた場所で、王太子と同じ様な部屋割りとなっている。三階には玄関ホールの真上が巨大バルコニーになっていて、そこからは前庭の景色が一望出来る。気分を入れ替えたい時はここに来てぼーっとする事もあったな……。

地下は貯蔵庫や備品庫の他は、私の入れない区域があり何に使っているのかは分からない。牢もあると聞いているので、そんな所かな？とは思っているけど。

ちなみに「黒妃執務室」は三階。ジョイ二の関係者でも立ち入

り辛い、私の区域に用意した。

後は庭なんだが、宮の内側に凹んだ部分から裏庭に当たる。

そこから先に拡がる範囲は運動場をも凌ぐ広さだ。離宮で働く使用人達の居住棟もここに建てられ、厩舎なんかもここにある。

宮の周囲は、人の身長程ある樹木の生垣で囲われているだけで、防犯的にはどうなんだろうと思った事があったが、一応城内だしその為に庭もだだっ広くとられていると聞くと、そういうもんかと納得するしかなかった。

そして裏庭と言えば、調理場の勝手口を出ると外階段が続き、その下すぐ目の前には井戸が掘ってある。そこは野菜等の洗い場にもなっていて、料理人達の休憩所も兼ねている。本当の井戸端会議を始めて目撃した時は笑いながら感激してしまった。

そして表に周ると、玄関ポーチは馬や馬車が横付け出来るロータリーになっていて、そこから門まで続く石畳がまた長い……。

その両側にはこの宮の顔に相応しい豪華な庭が整えられている。いいや、これはもう庭じゃない。緑地公園と言ったほうがしくりくる。

その中でも一番目立つのは小さな神殿と称すればいいのか、宮とは趣きの違った真っ白な建造物が池の真ん中に浮いていて（浮いてはないが）

金色の橋が架かったそこは、離宮用の祈りの場だと教えられた。

とにかくどこもかしこも広いわけです。真、王の住まいですから、当然なんです。

ですがねえ、思った通りと言いましょか、ここもまた例に漏

れず　当初庭で言えば、単色の白なら白、赤なら赤という限定色で花が植えられていたので、庭師と相談して色取り取りの花達に替えてもらい、最近ようやく完成したばかりなんですよ。私は別に派手好きなわけじゃない。でもこの広大な敷地で白薔薇、赤薔薇ばかり見るのも芸が無いじゃないか。せつかくの優雅な薔薇も地味な印象になるだけだし、飽きる。聞けば「前からこうしてるので」と、どこかで聞いた台詞が帰ってきた……。

素人だから良し悪しは語れないけど、少しくらいは工夫せんかい！　とだけは言いたくなかった。（言ったんだけどね！）

「いつ見ても、もったいない広さだねえ……　畑にすればこの分くらい余裕でまかなえそうだよ」

庭の芝生を踏みしめながら、手近に咲いていた花を指で弾いた。

「ふおふおふお、そういう訳にもいきますまい。　王の家の前が畑とは」

「そうだよねえ。　本人は庭なんて全く興味なさそうだけど」

「そうですかな？　殿下は最近、庭が明るくなったとおっしゃってましたが」

庭師のズーライ爺ちゃんは皺枯れ声で笑っていた。　へえ、そうなんだ。　てつきりそろそろ文句でも言われるんじゃないかと思っていたから、なんだか意外だった。

ソルンとの勉強会も一先ず区切りをつけた。　今後の勉強の事も考えつつ、今日の午後はゆっくりしようかと散歩でもしている。

最近、メンバー集めの事で頭がいっぱいだったから、一息ついて

少しすつきりさせないと、ろくでもない事をしでかしそうだ。一日くらい神様も見逃してくれるだろう。歩き疲れたところで、そろそろお茶でもしようかと、宮沿いのテラスに足を向けた時だった。

「フジカ様！ 宰相閣下がおみえです」

侍従の一人であるランブワーが足早に近づいてきた。

宰相？ 彼とはここに移ってから一度も顔を合わせてはいない。いつもジョイニにこき使われて忙しくしていると、ソルンには聞いていたし、その彼がわざわざここに訪ねてくるなんて、どんな用件なんだろう。

「そう、彼はどこに？」

すぐ行くと居場所を訪ねたところで、建物からこちらに向かってくる二つの人影が見えた。

「お久しぶりでございます。 姫様」

相変わらずダンディーな紳士。 今日も赤い髪が眩しいよ。 にこりと笑みを返して小首を傾げた。

「こちらこそ。 モングラントさんがこちらにみえるなんて珍しいですね」

「ええ。 今日ご紹介したい者がおりまして、連れて参りました」

宰相の後ろから一歩前へ出てきた凜々しい男性が恭しく礼をとっ

た。その挨拶を軽く遮り、とりあえず向こうのテラスで話を聞くと二人を促して、ランブワーには目配せをしておいた。

席についた所でお茶が届き、もう一度挨拶をされる。彼は”ニールドラス・マーズ・ヒミッド”と名乗り、宰相補佐官としてモングラントさんの下についている雑用係りだと言った。灰色の髪の毛に、灰色の瞳がきりつとした面立ちを惹きたて、表情も文官にしては生きがいい。まるで狼のような男性であった。

「こちらの素敵な男性がなに？」

「ソルニアード殿下より、姫様が内政について学びたいとお聞きしましたので。この者なら上手に姫様の御指南役が出来るかと存じます」

「指南役？ ただの教師じゃなくって……あ、まさか、ジョイ二？」

宰相は一瞬面食らった顔を見せたが、すぐに苦笑いを溢して「勘がいいですね」と頷いた。その苦笑いが意味するものはなんだ！ しかも宰相室から？

「姫様が、殿下を愛称で呼ばれているとは知りませんでした」

「え？ あー、いやいや、ごめんなさい」  
うっかりすべらせてしまって、なんか恥ずかしいような、変な気になる。夫婦になるんだから別におかしくはないと思うが、人から指摘されると案外くる。ちよっと考えたいのに、今のでほわつとしちゃったじゃない。

「いいえ。殿下もご自分でお知らせになればよろしいのに、ソルニード殿下からとおけと」

ん？　なんか今のは変だ。　ジョイニはこの間苛立っていたし、別にソルンを引き合いに出す必要もない。　私が直接ジョイニに詰め寄ったんだし。　彼はそんな事言うだろうか。

……じゃあなにか？　宰相の芝居か？　殿下も照れるなんて可愛いですねー愛されてますねーなんて事実無根と分かっていて焦点をずらし、この男を教師に、私の部下に当てた？

考えすぎかな……。

でも、この人も国の宰相だ。　笑顔で小娘を丸め込む、それくらいの腹芸はお手の物だろう。　今は、乗るしかないのか。

「そっか、じゃあそういう事にしといて！　殿下には私が喜んでたって伝えて！」

胸の内は隠して、満開の笑顔で宰相に言った。　「はい」と返した彼にもう一言付け加える。

「でもいいの？　宰相室からなんて、優秀な方でしょう？　モン格蘭トさん困らない？」

「ええ、大丈夫ですよ。　この者にも姫様の斬新な考え方が勉強になるでしょうから」

私はこの上なく申し訳なさそうに、でも心から嬉しそうに見えるよう頬を動かす。（はしゃぐ手振りもつけてやる！）

宰相はそれを見て、安心させるように、優しく見えるように口角を上げる。

もう一人私が見てたら、それは寒い寒い光景に見えただろう。

宰相は今のをどこまで読んだかな。

スパイではないが、洗脳係りというのが彼の役目として妥当なところか。

ふう〜、それならそれで、こっちから先に暗示をかけてやろうじゃないか！

「あ、それから、……姫様。……本日殿下はお戻りになれないそうです」

微笑みから一転、少し寂しそうな苦笑を残して、宰相閣下は一人本宮へ戻って行った。

11： 狼ってどじなの？ (前書き)

とにかくごめんなさい。ぶほっ

11： 狼ってどうなの？

殿下は戻らない？

忙しい案件でも抱えてるのかな？ まあ王子なんだし、男が仕事で帰れないことくらいあるだろう。何もそんな悲しい顔する程、珍しいことでもないと思うんだけど。

ん？ 男……。 ああ、男……。

なるほど、そういう事か。忘れていたが思い出した。そういう事。

気付いた途端、どうしてか分からないけど、胸の奥に少しだけ暗い澱が溜まった。

「大丈夫ですか？ 姫様」

ちょっとした間思考に持っていかれた私を気遣って、ニールドアスが顔を覗きこんできた。知らない内に顔を歪ませていたのかもしれない。

初対面の男にしては少々近い距離が不躰に感じたが、たいして心配はいらないと、彼に向かって碎けた顔を見せた。

「姫様はやめてよ。 フジカで良いわ。 宰相殿にもそう言ってるんだけどね」

「承知しました。 ですが、フジカ様もモン格蘭トさんと」

険のある顔つきだと思ったが、それをくしゃりと崩し三日月に目を細める様は、女を落とすのに一役買えそう。 女性とは違うもの

の、しなやかな指先でカップを握る仕草にも、男の色気が滲み出ている。気がする。

「はは、そうだね。 気をつけないと」

なんだか妙な誤魔化し方をしてしまった。

私も気を取り直して彼に対峙しなければ。

「ところで、貴方は私の下へ来る事に抵抗はなかったの？」

ちらりと流し見た彼は視線を明るい庭へと向け、私への答えではなく独白のように呟いた。

「さあ、どうでしょうか。 私にとっては何処であろうと、誰の下であろうと、城で働いていられれば関係ないですから」

憂いを帯びた口調に、どこか投げやりな台詞。 だけどそれを問うことも、咎めることも やめた。

「そう。 じゃあ私は、貴方を満足させられる仕事を与えられるよう、努力するわね」

ニールドアスは、私の顔をまじまじと見てにこりと頷いた。 (おーかつこいいなあ！おい！)

先程までの影は消えうせ、真摯な働く男の顔に戻る。 それからは授業についての希望などを打ち合わせ、時折雑談も交える。 その時彼が同じ年だということも知った。 そこに親近感が沸いたのか、私もこれまでの仕事のことを色々聞かせたり、失敗談なんかも披露してしまった。 始終にこやかに歓談が続き、キッポ達とは違う久しぶりの感覚に喜んでる自分がいる。

ニールドアスと仕事がしたい。

彼を全幅の信頼をおける味方だとは、まだ思えないけど、端から敵対視するのは私の誤りだったかもしれない。 そう思わせてくれ

る人物だった。

そもそもジョイニは敵じゃない……。 もう一つそれも反省した。

明くる日、予告通り帰ってこなかったジョイニが気にならないといえは嘘になるが、普段通り調理場で朝食の支度をして、のんびりと朝食を終えた。

午後にはニールドアスがやってきて、早速始めての授業に取り掛かる。

まずは現在、政治の決定権がどこにあるか、どの程度の者から発言権を認められるのかという初歩的なところから聞いていく。

彼は私を侮りもせず、具体例を挙げながら丁寧に教えてくれた。

「極端に言えば、全ての権限は王にあります。それも今では王太子殿下に引き継がれておりますので、殿下が採決を下す事で物事が万事動くのです。ですがその前に議会によって審議が行われ、そこを通過しなければ殿下の元へも案件が届く事はありません。言うなれば、王の独裁にはならずとも、議員達の思惑が働くということですよ。まあ、各々ご自分の保身や領地の益を重視していますので、余程のことがない限り議会が結託することはありませんが」

「では、王の考えは政治に反映されない？」

「いいえ。王からの提案は宰相閣下が議会議員の一人として議題に挙げられます。そこで承認を得ないといけないわけですが、人事権は王にありますので、安易に切り捨てられることはありません。

その意味がお分かりになりますか？」

「ええ。形は議会制でも、愚王の治世になればやりたい放題のことね」

「そういう事です。その面では、王太子殿下はとても公平で国に尽くしていらっしゃる」

その面では……これも含むところがありそうね。

聞くべきか迷っていると、向かいの席からニールドアスが挑戦的な目で私を射抜いた。この目はジョイ二にも似ている。

「フジカ様は、この国の財源がどこにあるかご存知ですか？」

「ええと、農業も海産物も資源が豊富と聞いてるわ。各領地からの税収じゃないの？」

うんうんと相槌のように同意しながら、どこか正解にはほど遠い雰囲気を漂わせニールドアスは自分の指をぐっと握り合わせた。

「この国の源であり、最大の膿でもある ” 神の光輝 ” ですよ」

神のなんちゃら また出てきた！

以前、ソルンから神の恩恵を受けていると聞いていたが、それは私なりの解釈で魔力なり、神力なりのファンタジックな力を持った人がいるだけだと思っていた。その力で魔術だか神術だか分からないが、私をここに呼び寄せたりと、不可思議なことが出来るんだと。

要はこの国に魔法使いがいるという認識だ。

「その ” 神の光輝 ” 　つて、一体何？　お金になる意味が分からない」

「ソルニアード殿下は、そこまでお話にはなりませんでしたが？　まああの方は神殿の方ですから、そうかもしれません」

すっかり狼の顔に戻ったニールドアスは、長くなりますがと前置きして冷めた口調で語り始めた。

「ずっと昔、建国の時に遡ります。　まだどこにも国が存在しない時代、人々がいくつかの集落ごとに纏まって争いが絶えない時期を迎えました。　それを憂いた神が一人の男に神の力を少しだけ授けたのです。　その力は大地を潤し、水を生み、人々の心と体の傷さえも癒していきました。　そして神は男に建国を示唆し人々の繁栄を願いました。　それがこのカニムーチョ王国で、王家の人間にはその力が代々受け継がれています。　しかし現在に至るまでには、王族内でもさまざまな権力闘争が起こり、または人口が増えていくにつれ、統治するには広すぎる国土を分かつ為、新しい国が次々と生まれていったのです。　それからは国同士の戦い、主に我が国を狙った争いに発展し、神がとうとう降りてこられました。　神はこの世界全てに響き渡るよう『善良なる地に恵を』と、光を落とされた。　それが ” 神の光輝 ” です」

「待つて、建国以来この国は攻められた事はないって聞いてたよ？」

「表向きはそうです。　ですが厳密に言えば、光が落とされてからというのが正しい。　国史としても、神に愛されし国は、攻め入ら

れる事などあつてはならないからです」

うむ、体裁は分かるけど……なんか騙された感が拭えない。

まあそこら辺は置いて、その光つてなんなの？ とせつつく私に彼はゆつくりと頭を振った。

「神は光を、”力”を遣わしたのです。力とは言葉通りで、あらゆる物の動力源にもなるもの。そして王家だけではなく、気紛れのように一般の男子にもその光を扱える力を与えた。薪で火を焚かず、光を詰め込んだ輝石がエネルギーとなり、熱を熾し灯りを生んだ。それから人智の及ぶ限り、目覚しい進歩を遂げてきました。その反面、力を持たぬ女性は虐げられる時代が長く続いたのです」

ごくりと喉がなった。ここで女性が出てくるなんて。

「虐げられるって？」

「男児を産ませる。その為に全てを捧げるのです。時の有力者達はこぞって女性を囲い、次々に子供を産ませた。女兒はすぐに殺され男児でも跡継ぎを残し、力の発現が見込めない者は容赦なく切り捨てられた。国も力を扱える者を重用したからです。その輝石は国の重要な産業になりました。我が国の他にも三箇所光が落ちたとされておりますが、一つはこの国には伝わらないなんらかの理由でいつしか消えたとされています。その他の国にとっては有力な資源といえ、今でもその貿易で成り立つものが我が国の最たる収入源なのです」

頭がだんだん、こんがらがってきた。魔法使いが現れ、次々その魔法使いの子孫達が国を興し、戦争を起こし、戦争をしなかった国に油田を与えた？

油田の利権は男性のみに与えられ、その為男児だけが金を生む鳥？それが国や家の繁栄ってことなのか。

ん〜、一言で言えば、アホくさい？んな馬鹿な！（あ、二言になった）

ニールドアスの説明は簡単にかいつまんだだけだろうし、歴史的にみれば不可解な思想が当たり前のように善とされる事もあるだろうが……。

私には理解不能　よって流されたくない。

「だけど、女性がいなければ、子供は産まれないよね」

「はい。そうです。女性の人口が極端に減り始めた頃、ようやく国が女性の保護を訴えました。それが今回のお告げがなされたという、百年程前と時期が重なります」

「え？　えええ？　今、さらっと大事な事言わなかった？」

またもや、またもや、口から先に思考が飛び出た。　なんかすごく意味深なこと付け足されたんじゃないの。

「女性の保護といえど、現在でもフジカ様の懸念通り女性は駒に過ぎません。その考え方は上の者になるほど強く残っています」

ニールドアスは唇を噛み、苦々しい表情で締めくくった。　私の動揺なんてお構いなした。

でもこの苦い顔には彼の憂いの原因が隠されているような気がして、とても気になる反面、全てを信じきれない自分が嫌な人間にも思える。話が私寄り過ぎた。

私という人間を分析済みで、これが彼の戦法だとしたら……だめだ。

昨日反省したばかりなのに。ん〜どうすればいい！

昨日の宰相のお芝居が尾を引いているのかな……

でもでもやっぱり気になる直感を今は信じてみたい。

「源であり、濃ね……」

じっくり考えてみよう。

11： 狼ってどうなの？（後書き）

前話から続き、退屈部分が長すぎますが（どこも退屈かもしれないが）

これ入れとかないな〜と思ったら、あれもこれもと、詰めてしまいました。

でもって、フジカも葛藤の連続で、単純なことでも疑心暗鬼真っ最中です。

またこれからもよろしくお願いします。

## 12：くっさー！

あれからニールドラスとの勉強会は滞りなく進んでいる。

彼は私に対して表面上の線引きを見せようとはせず、聞きたいことはなんでも答えてくれている。

淡々とした物言いの中で、主観は交えず現実のみを語る様は私にとって是有難い。その真偽を確かめることは今の私には出来ないけれど、虚偽を刷り込む必要性も感じられないので、素直に鵜呑みにしている。

彼の声はそれをさせてしまうほど、聞いていて心地良い響き。男性として高くもなく低くもなく、音階の揺らぎを感じてしまう。

お互いに初日の硬さは薄れてきて、気安さを感じてきたから余計に。

だけど、たまに見せる人を喰ったような顔つきは背中をぞくりとさせるほどの艶っぽさを醸し出し、間近で「どう思います？」なんて目を覗き込まれれば、間違いなくどきりとしてしまう。

その度にキツポが横から「近い」と大きな体を割りいれて、ニールドラスを睨みつけている。ご主人様を取られる犬のようで、愛い奴めと毎度ニヤケが止まらない。

最近のキツポはニールドラスに対して妙に執着している。執着とは変か……と試してみても、常に意識して対抗心を燃やしているところは執着と言ってもいいくらいだと思う。

この前は一人、ニールドラスの仕草を真似て袖のカフスを弄りながら「ええ、まあ」なんてやっていた。（カフスを弄るのはニールドラスの癖だ）そのキツポを影から覗いていた私とランブワーは腹を抱えてこっそり爆笑した。

そっちに目覚めるんじゃないぞ（むぶぶっ）

ある日の夜のこと。

私室のリビングには、私の他にキツポとイコシスの姿があった。私には四人の侍従がついてくれているのだが、熱い青年キツポに慌てんぼうのランブワー、冷静沈着なイコシスに、奇抜な根暗サトツシユという個性豊か、年齢層も二十から三十とバラエティーな顔ぶれだ。

昼の間は侍従が一人で部屋に入ってくることも、なんら問題は無いのだけれど、夜の時間帯にはこうして二人一組で室内に入る。

私が寝室に入る頃になれば一人は向かいの控え室で休み、一人は自室に戻るといのが決まり。勿論部屋の前には護衛騎士が居るんだけど。

私如きに寝ずの番も申し訳なさすぎるが、決まりは決まりとして有難く受け取っている。

「ねえキツポ、イコシス、ここで働く人って何人くらいいるんだっけ？」

グラスに満たされた果汁を口に運びながら、なんともなしに尋ねてみた。入浴の支度に取り掛かっていたキツポと、ワゴンの上に水差しを戻していたイコシスが同時に顔を上げた。

「下働きすべて含めると、六十名程。他に護衛は変動がありますが、入れて凡そ八十名でしょう」

キツポがええと、と指を折っていく合い間に、イコシスがワゴンを遠ざけながら涼しい顔で答えてくる。それを聞いたキツポの顔がしゅんと萎れたのをイコシスは無視で通す。私も無視で通す。

「八十か。和楽屋と変わらないねえ」

それがどうした？ と言いたげな二人を前に、私はどかりとソファーに身を沈め天井を仰いだ。視点は定まらないが、頭の中ではめまぐるしく電卓を弾く。和楽屋にいる時の習慣を思い出していた。

床を磨いている姿や丹念に雑草を抜いている姿、馬の背を洗う姿を何度も目にしてきたが、中年から上と思しき使用人は私の知るところ数名程度しかいない。あとは年若い青年や、幼すぎはしないかと心配になる少年の姿ばかりが目につく。

これまで自分の事で手いっぱいだったが、まだ名前も碌に覚えてはいない事にがっかりする。大鬼ババ様なら、やるべき事がたとえいくつあっても、同時に難なくこなしてしまうんだらうと、自分の不甲斐なさを恥じた。

「彼等の身上書はある？」

「はい」

「じゃあ、それに特徴を書き加えて、私に頂戴。それイコシスに任せてもいい？」

諾と承ったイコシスに、恨めしげな視線を向けるのは赤茶髪のキツポ。元々まんまるな目をしているせいで、大して迫力は出ていない。

そこで私の回想も晴れ、途端に面白いものを求める思考に切り替わった。次はイコシスを真似ながら「畏まりました」なんてやってくれないかな、彼の癖は金八と一緒にだ。耳に髪を掛けながら「なんですか」もいいたろう。いや、やるな絶対！君なら出来るよ！

キツポとイコシスを見比べながら内心グフグフと妄想をかきたてた（すまん！若者よ！）

そんな時、階下から慌しく上がってきたらしいランブワーが息も整えずに部屋へと滑り込んできた。

「殿つ下、殿下のお帰りと先触れが参りましたっ！」

その知らせに驚いてソファから跳ね起きた。もうだいぶ夜もふけ、食事も片付けて今日もつきり帰ってこないものだと思っていたのに。

ジョイニが帰れないと言った日、あれから四日はこの離宮に戻っていなかった。

知らせは始めの一日だけだったので、毎晩彼の分も夕食を支度していたのだ。それを捨てる時の虚しさというか、切なさは、料理人の心情だったのか、婚約者としてのものだったのか自分でも分からない。

一度鏡を見てから階下へ向かう。歩幅はいつもと変わらないのに、どこか気が急いでる感じがしていた。

暫くすると馬を預ける声が外から聞こえ、玄関口の扉を開く護衛兵がジョイニと付き従う従者を出迎えた。

「おかえり……」

なさいと続けようとした声は、彼の顔を見て途切れた。

ジョイニが私の顔を見て笑ったからだ。

それは一見すれば久しぶりに会った婚約者に対する優しい微笑みに見えるはずだが、他人行儀の過ぎるよそよそしさが張り付いているように感じた。

私に始めて向けられた笑顔はそんなものだった。

「酔ってるの？」

「いや、飲んでるには違いないが、酔ってはおらん。それより腹が減ったんだ、何か作らせるように言ってくれ」

ベロベロとはいかないが、彼は十分酔っていた。気持ち悪い笑顔で近寄ってきた男からは、きついアルコールの香りと、服の方から微かに甘い花のような香りがした。

「畏まりました」

嫌味で言ったつもりはなかったが、多分癖のようなものだったと思う。その言葉を聞いてジョイニは眉を顰めた。

「お前が遜る必要は無い」

言い終わればいつもの仏頂面をぶら下げて、侍従と共に自室へと足を向けていた。（このタコ助が！）

コンコンコンコン

私はせっかちに扉をノックする。

すると中から顔を見せたジョイ二の侍従、壮年のアドールが一瞬驚いた表情を見せ、すぐに部屋へと引き入れてくれた。

ジョイ二の部屋に入ったのはこれが始めてだった。用があれば侍従への言付けか、彼の仕事部屋で済んでいたから。

へえ〜ってな感じで見回してみると、部屋全体はシックな装いで統一されていた。重厚感のある家具は私の物より一回り大きく、またしてもソファアの背もたれには届かないだろうと見た目で分かる。

酒瓶が並ぶガラス張りの戸棚、分厚い本で埋め尽くされた書棚、一人用なのに無駄にでかいテーブル。

装飾品はほとんどなく、花一つ飾られてはいない。私の部屋もシンプルなつもりでいたが、小花柄の壁紙や写真立てくらいは可愛らしさもある。

ここには暖かい生活観はまったくくないな。例えて言うなら爺さんの隠居部屋だ。（枯れてんな！おい）

散々部屋を論評しているところで、ジョイ二が奥のバスルームから出てきたのが分かった。

「夜食、持ってきたよ」

修行中、飲んだ後の締め料理はよく作らされていた。いつもは濃い味を嫌う先輩達も、飲んだ後は決まって「薄い」と文句を言う。それでも明日の胃を慮ってか、出汁と塩の効いた堅めのおかゆが不動の人気だった。

テーブルに土鍋や漬物の皿を並べる私を見て、ジョイニは頭を拭いていたと思われる厚布を肩から引き抜いた。

「何故お前が」

「そんなに飲んでてサンドウィッチじゃ、胃がもたれるでしょ。フジカ様特製おかゆ、評判良いんだからありがたく召し上げられ」

日頃ここでは純和食というものを作ってはいない。洋食に少しアレンジを加えた和食風とも呼ぶべき品を作ったりはするが、彼等の慣れの為に徐々にね、と思っっている。米に関してはこちらでも似たような使い方（全く似てないが）炊いて食べる主食代わりの食材があった。まあ想像するならクスクスの様に水分の少ないパラパラの桃色ご飯。それをリゾット風に毒々しい香辛料でスープ仕立てにするんだけど……。

な訳で始めて私が出してきた白米、しかもシンプル過ぎる器の身にジョイニの目は胡乱気に揺れていた。

「なんだこれは」

「これはね、米といってピオル（クスクスに似た食材）に近いものよ。家に来た時はパンにしたから食べなかったよね」

いいからいいからと、おかゆをよそい、深皿とスプーンをジョイニに握らせた。

それを口に運んだ彼は、その食感にびっくりしたのだろう。一口含んで暫く口を動かすことをしなかった。（噛まずに飲むな！）だが多分気に入ったんだと思う。次々に大きくスプーンに掬い、モグモグと食していく。たまに塩もみの漬物をアクセントにしなから食べる様子を見ると、私の満足感がかなり満たされた。

(よしよし良い子だ)

これで「おいしいよ」「くらい言えれば、上出来なんだけどね！」

そこまで見届けて、私もそろそろお暇しようとして椅子から腰を浮かしかけた時、向かいのジョイニと目が合った。

「寝酒の一杯くらい、付き合え」

(まだ飲むのか！)

### 13： タコ助のムツツリ酔い！

あんたは風呂入って、後は寝るだけなんでしょうがね、生憎私はまだなんですよ。

それに女の風呂上りは予想以上に手間がかかるもんでね、瑞々しさの足りないお年頃の私にとっては、そろそろ仕事というものなんですよ。

おたくみたいなの、洗いざらしても艶々キラリ、シミの一つも見当たらないすすべお肌ってわけでもありませんし、おまけに濡れ髪のままがセクシー、なんて、大惨事を引き起こす原因は作れないんです。

とは、一言も言えなかった。

その眼力の強さやめてもらえないかな。

風呂に入ったとはいえ、酔っ払いの目つきは普段と違って爛々と変な輝きがプラスされる。やだなあ、からまれるの。

仏心出して、自分で夜食なんて持つてくるんじゃないかな。自分に折り合いをつけて、ふうふうと溜息を吐いた。

「いいよ。一杯だけね」

すっかり小土鍋いっぱいのおかゆを食べ終わったらしいジョイニは、アドルに目配せをして酒の支度をさせていた。

アドルが棚から持ち出したのはワインらしき縦長の瓶。らしきと言うのは、私の世界でいう葡萄が原料の果実酒とは違って、黄金色した丸い大きな実で出来たお酒だったから。でも味は驚くほ

どワインに似ていたので、もうワインと言ってしまっても良い事でしょう。

それを、とくとくとグラスに注がれる。

ソファーに移動して対面に腰掛けた私達は自然と目を合わせて、グラスを持ち上げた。黄金色した液体に灯りが揺れる。少しだけ落ち着いたムードに包まれた。

一口、グラスに口をつける。もう一口。さらに一口。

「……………」

「……………」

なんか喋れよ！ 引き止めたくせに。

始めの支度だけをさせて、アドルを含めた従者達は、土鍋と共にさつさと部屋から追い出されていた。

二人きりの空間ではこの沈黙が居た堪れない。相手は王太子ヨジウラーニ。性悪を抜きにすれば顔も体も美貌の男だ。悔しいけども乙女心がいらぬ反応をしてしまった。

「それくらいで酔うのか？」

照れ気味に頬が熱くなってきたところで、そう言われた。こんにちは！ これは唯の生理現象だ！

「酔わないけど。……………なんか喋ったら？」

「側妃達は、我が運べば向こうから次々と話をふってくるが、お前は違うのか」

真顔で不思議そうに聞いてくるから、怒るに怒れない。

私はなんか知らない苛立ちを、また一口ワインを含むことで紛らわせた。

「ふん。 気の利いた奥さん達ね」

「だがお前のように、私の目を覗く者はいないがな。 酒は好きか？」

「え？ うん、好きだけど」

だったら飲めと、私のグラスにどくどくと彼が注ぎ足していく。

あゝあゝと思いつながら、こんな機会もなかったので、飲み過ぎなければまあいいかと思う自分もいた。

しかしはつきり言って、何が楽しいのか良く分からなかった。

相変わらずジョイニは話を弾ませることはなく、時々片言のように喋っては、一往復のキャッチボールだけですぐにまた沈黙が訪れる。 それでも私に帰れとも言わず、自分で酒を注ぎ足しては喉を潤しマイペースを保ったまま。 それをつまみに、ちびちびやる私。 ぬうういい加減、疲れる～～～！

そして彼が三杯目のグラスを空けたところで、もうそろそろ切り上げようと口を開きかけたら、突然ジョイニが私に向かって片手を伸ばしてきた。 私はその手をまじまじと眺める。 なんなんだ、この手は。

「来い」

端的な命令。意味が分からずジョイ二の顔を凝視した。

暫く見つめ合ったが、動かない私に痺れを切らしたのか、すくつと立ち上がった彼は私の隣に座り、頑丈な腕を私の腰に回す。(んん?)

そして腰骨辺りをぐっと掴むと、反対の手は頬に添えられ彼のほうを向かされた。

至近距離……光源を抑えた室内でも、青い目が美しい。

酔っ払いのサカリなのか？ そうなのか？！

はっと気付いても、体は捕らえられてしまったかの様に、簡単には拒絶を示せなかった。

息が触れ合う程の近さで名前を呼ばれた。

そして「愛でてやる」そう囁きの如く小さな声で告げられ、目の前でジョイ二の睨が伏せられた。次の瞬間には唇に柔らかいものが触れる。

項には大きな手の感触。上からやや押さえつけるように口付けられ、それを庇うように背中を支える腕にも力が込められた。

啞然としたまま、目を開きっぱなしの私。

何をされているかは分かっているし、人並みには経験もある。

ただ メデテヤルの意味が全く分からず、ずっと変換を試みていた。

数回のキスの後、好きなように唇を食ませていたけれど、首筋に顔が傾いたところで思い切り胸を押し退けた。

「ねえ、メデテヤルってなに？」

いきなり中断されて、思いもよらない台詞を吐かれて、ジョイニは目を瞠っていた。

「何を言ってる…… 可愛がってやろうと言ったままでだ」

情性でようやく出たといった感じの不拔けた声だった。

だが、それを聞いた私の心中は穏やかではなくなり、疑問も瞬時に霧散した。 代わりにメキメキと怒りが湧き起つ。 偉っそうに！

「抱こうと思ったの？」

「ああ」

メラメラ メラメラ

「だったら別の日にお願ねがいすることね。 あんた今日、別の女抱いてきたんじゃないの？」

「誰も、だ」

「もういい。 私が乗り気の日ひに、貴方を抱いてあげるわ」

言い淀んだジョイニの言葉を途中で取り上げ、蟠わたかまっていた気持ち  
を吐き捨てた。 目の前にあった足を蹴り上げ、自分の通路を作る  
とさっさと扉へ向かう。

後ろ姿は、さぞかしぷりぷりとした無様な女の姿だったろう。

「あゝむかつくわっ！ このムツツリ酔っ払い！」

大声と一緒に扉をくぐり、乱暴なほどにボタンと打ちつけた。

部屋の前で番をしていた護衛と目が合い、私の大声に驚き、控えの間から飛び出てきたジヨイニの侍従に瞬かれ、やり場の無い悔しさが倍增する。

「送ります」と言われ、護衛の後に続きながらそれさえも感に触つて、八つ当たりしてしまいそうだった。さすがにそうはしなかったけど。

そうだ。途中から明らかに怪しかった。

私のグラスに勺をしたり、目が若干トロンとしてきたことは、真正面に居たんだから丸見えだったはず。

結婚する相手だからね、キスがどうとか、体をどうとか、言うつもりはない。

「ただ外泊帰りで、お土産に甘い匂いをつけて帰って来た日にゃー、ほいほいと差し出せるもんか。馬鹿野郎！」

とか言つて、ぼーっとしてしまった自分にも腹が立つ。

今まで造形の優れた男に恵まれなかった私に、そんな免疫あるわけない。（あ、過去の人は良い男だったわよ。いちお）

逆ギレが、逆の逆ギレか。部屋に着くまでに、誰に対して悔しくなっていたのか、分からなくなってきた。

ドスドスと鳴り響く廊下の足音を聞いて、今日の当番だったイコシスが静かに出迎えてくれる。

ちよっただけお兄ちゃんのイコシス。その彼の腕に縋り付いて、

グリグリと頭を擦り付けた。

「イコシス〜、お風呂〜」

「はいはい」

何があったのかは突っ込まず、好きにさせてくれるところは頼りになる兄貴分だ〜。

私も少々酔ってるかもしれない。イコシスのあしらい方を見ていてそう思った。

ザッブーン                   バシャバシャバシャ                   ガリガリガリガリ  
ガリガリ   又オ〜

その日浴室からは、随分と念入りな（イコシス談）、肌を擦りまくり唸る音が鳴り響いていた。

道連れに部屋に引き入れられていた護衛の彼も、顔をひくひくさせていたとか。



13： タコ助のムツツリ酔い！（後書き）

ジョイニではなく、私が暴走したのかも・・・。

## 14： ジゴロは死語かしら

次の朝、私が調理場に行ってる間にジヨイニは本宮へと出掛けていた。

「すまなかつた」の一言もなしか。顔を合わせるのも怖くて逃げ出した臆病者め。

いやこれは彼が悪いと自覚があればの話だが、奴の事だ、きつと訳が分からず面倒臭くて避けただけだろうな。ふんっ！可愛げのない奴。

朝食の間は、従者の四人が今日の仕事を確認する為に付き添っている。調理場の隣に設えられた身内用の食堂。日頃二人にしか使われる事のない大きな木の天板、八脚も並べられた揃いの新しい椅子。それらにも、窓から差し込む朝の柔らかい光が反射し、まだ早い時刻を告げていた。その一番端っこに座って自分で作った朝食を口にする。

それを取り囲むように四人が配し、心配げな、好奇心ありげな、気遣わしげな眼差しで給仕に務めていた。

昨日の怒りは既に残っていなかったが、いい機会が出来たし、それを存分に活用させてもらおう。そんなことを考えながらモグモグと咀嚼を繰り返した。

「キツポ、ミンバルクだったかな、今日彼の元を訪ねるわ。午後二時ドラスが来たら本宮へ出向く。先触れはいらないわ。護衛は四人で良いからイコシス連絡をしないと。それと今日、器の見本が届くから私の部屋に。そうねサトツシユも連れて行きます

よう」

「あの、私は」

次々と指示を伝える私に、ランブワーが慌てて問質した。

「ランブワーとイコシスには残ってもらわなくちゃ。ここを任せる人がいなくなるでしょ？ コウルには夕方一緒に器を見て欲しいと伝えておいて」

うつつと笑顔を見せればランブワーは 怖いものでも見たかのように一瞬引き攣った。（失礼な！）

指示を出すときの私は何故か早口になる。いけない癖かもしれないが、和楽屋時代には悠長に構えてなんていられなかった。（鬼がいるからな！）

指示は一度だけ。慣れない内は顔を上げる事無くメモを取れ、と口が酸っぱくなるほど徹底させた。質問は受けるが二度目の指示はない。大鬼のやり方だ。彼等はそのやり方をいち早く自分のものにしてくれた。和楽屋の従業員並、それ以上に優秀で、私には過ぎた従者だと思っている。

本宮へ乗り込むには目立たない方がいいが、必ずすぐにはれることが分かっているので、返って強烈な印象の方がいい。

その点サトツシユは紫と金という二色に分かれたド派手な頭髪を持ち、服装も侍従の制服に赤や青といったスカーフをまるで戦隊ヒーローのように首に結びつけている変り種だ。（本来は白のスカーフが支給され、みんなアスコットタイの要領で首に巻き上着の中に仕舞っている）

彼は ”例の力” を持って産まれたらしいが、何の突然変異か、

十を超えた頃から徐々に力が使えなくなり従者の道に進んだという。髪の色もそのせいだと本人は言っていた。

彼の生い立ちはなかなか……複雑だが、詳しい説明は省略。そんな奇抜な見てくれでも中身は根暗、イジジするタイプじゃなくて、思考全般が刹那的というかなんというか　そういう男だ。面白みがあつて私は好きだけど。

そのサトツシュを共に城内を闊歩すれば、自然と目は集まる。瞬く間にジョイニへと報告がいき、宰相を交えて人材確保の手間が一度で済む。　そんな算段をつけていた。

「私が本宮へ行けば、そこいらに漂っている悪霊達を引き寄せますが」

「おいおい、今日は悪霊か。　日替わりでお化けを替えるのはやめてくれ。」

「サトツシュ、君はいるだけで盾になるんだから。　一緒に来てよ」

私の言葉にしばし逡巡していた。　目をぱちくりさせて”盾、死、戦死、褒美、地獄、灼熱、褒美……　無念、怨霊、永久、褒美……”　もそもそも不穏な単語を口走る。　お前の脳はいつたいどんな回路だ。　浮かんだ画が見たいようで、絶対見たくないぞ。

「……御意に。　姫様の盾に散っていくのも悪くない」（嘘つけ！）

「死なんから……。　お話しに行くだけだから、ね」

トホホな私。　他の三人は慣れたもので完全にスルー、すぐに自

分の持ち場に戻りそれぞれ散っていった。

正午に近くなつた頃、馬の到着する音が聞こえ、部屋の窓から身を乗り出した。

ニールドアスが来るにはまだ早い。お客も滅多にこないこの離宮では、今の時間帯、働く使用人達が賑やかに汗を流している。その間を縫って馬をポーチに横付けさせ、颯爽と飛び降りた身形の綺麗な男。何者だと疑わずにはられない。暫くするとイコシスが来客を告げにやってきた。

「殿下のお遣いの方ですが　ちょっと……」

「ちょっと?」

「いえ、位の高いお方ですので、何でもなければ宜しいのですが」  
位の高いジヨイニの遣い?　なんだと思う?　とイコシスと首を捻りながら応接間へと足を運んだ。

濃緑の上着に金縁の糸が縫い付けてある豪華な制服。ニールドアスに習った記憶をなぞるとあれは王族の印だったか。王族には神官や騎士が多いと聞いていたが、それでもソルンの神官服のように長たらしい衣でもなく、騎士服のように丈の短い上着でもない。上着の形は間違いなくニールドアスと同じ文官のものだ。マッ

シルームカットに近い輝く金の髪。色素の薄いグリーンの瞳がお人形のような顔。顔かたちも顎の線が細くどちらかといえば女顔。

一人でここを訪ねるなんてよつほどの人物か、不審者だろうと、怪しみながらも顔は平然を装った。

「いらっしやいませ。殿下の御用とお聞きしました。私フジカと申します、はじめまして」

儀礼に則り恭しく両腕を胸の前でクロスさせ、膝を軽く折った。

こちらの女性の挨拶の仕方。

すると腰掛けていた男が両腕を広げて立ち上がり、甲高い奇声でもって迎えられた。

「やあ〜！ フジカちゃん！ モングラントに聞いてた通り可愛い子だね〜。おまけに賢そう〜で、匂い立つ色気がたまない」

誰だこいつ。可愛い、色気？ 五十を超えたオジサン達しか言わないような台詞だそれ。女顔のくせに丸つと不埒な優男の雰囲気。漂わせてマツシルームカットの男は目を細めた。キョトンを通り越して、あんぐりだ。

「僕ね、名前は”セキンテッド” 暫く城を空けてたからさあ、挨拶が遅くなっちゃったね。ごめんね。ちなみにジョジウラー二とは従兄弟同士だから」

現王弟の三番目のご子息様ですと、こっそりイコシスが耳打ちしてくれた。

「は、はあ」

「ほんとほはさ、僕が神殿の長だったのに、ソルニアードに取られちゃったでしょ？ だから、ちよつと拗ねちゃってね、ぶーらぶら外遊出来る暗黒の世界に足突っ込んだじゃったわけ。どお？ 影のある男に惹かれちゃうでしょ？」

聞いてもない事をつらつらと喋るマツシユルーム。

「で、久しぶりに帰ってきた所で、フジカちゃんの話聞いてちゃったわけ。もう体にの〜んと稲妻走っちゃったよ〜。僕こそ姫君の僕に相応しい者はいないってね」

そこまで言い切ると気持ち良さそうに、ふ〜と息を吐き出した。

きもい。それが第一印象。全部聞いてもさっぱり意味が分からない。稲妻はの〜んと走らない。

「それで、殿下の御用とはなんだったんです？」

話をまるっと清清しいほどに吹き飛ばして用件を聞いた。

なんだかそれがお気に召さない様子。マツシユルームもとい、セキンテッドは片眉を跳ね上げると、対面に座っているにも関わらず身をぐいっとテーブルに乗り出した。そして私のお茶に人差し指を突っ込み、そのまま滴る紅茶を引っさげて私の唇に擦り付ける。ニヤリと笑う仕草が、どこぞのジゴロかと思うほど艶やかで、思わず下腹にきゅっときてしまった。

「フジカちゃん、僕が君のお仕事手伝ってあげる。なんなら別のことも」

指で唇を弄られながら目を射抜かれ、低い声で囁かれると凄みさえ感じてしまう。

だが真面目に言ってるのか、不真面目にからかっているのか判断しかね、私は半目で見下ろした。 ついでに割って入ろうとしていたイコシスも目線で留まるよう制した。

「いらん」

「ええ、どうして！ 僕、これでも頼りになる方だよ？ 他の奴より暗部も十分知っちゃってるし」

「暗部？ 暗部って何？」

どかんと席に戻り足を組んだセキテッドは、やらしい表情を一変、唇を引き結んで真面目な顔を見せた。 こういう時は男顔にも見えるもんだな（注釈）

「城で立ち回ろうっていうんでしょ？ そりゃ、恐ろしい連中はいっぱいいるんだよ。 ジョジウラー二も含めてね」

「え？ ……だったら、何故貴方は私についてくれるの？」

別に立ち回りはしないがと言いたかったけど、ジョイ二の名前が出たことで一気に勢いを削がれ小声になってしまった。

「僕は自由にさせてくれるジョジウラー二も好きだから、フジカちゃんに肩入れするわけじゃないよ。 ただ女の子が何かをしようなんて、面白そうじゃない。 それで二人がうまくいけばそれもいいし、駄目なら僕がさらってもいい。 何にしる面白そうだから絡んでみたいんだよね」

「……………」

あんたに攫われるのは遠慮したいですが。

結局のところ、面白そうなことに首をつっこみたい、が本心のよ  
うだ。

灰汁の強い人だなあ……。　　だけど、言動の端々に鋭さが混じっ  
ていて、只者ではないと第六感が告げている。　　ソルンの胡散臭さ  
を、輪を掛けてひどくした感じの男だが、色んな腕は持っていそ  
うな気がした。

「そう。　　じゃあこれまでの仕事は？　　貴方は王族なんだし、  
私が勝手に引つ張るわけにはいかないわ」

「ああ、それは大丈夫。　　モングラントにはもう言ったから」

「……………」　　どういふ風に言ったのか聞いても？」

「うん。　　今日から僕、フジカちゃんの部下になるから。　　それだ  
けだよ」

「あつそう。　　じゃあジョジウラーニも了承済みってこと？」

「勿論さ。　　だからこれ預かってきたんだ。　　はい」

そう言ってセキンテッドは懐から細長い木箱を取り出した。　　私  
に渡る直前に「喧嘩したんでしょ？」とやらしい含み笑いも添えて。  
なんだろうこれ、と繁々と木箱を見つめ、彼と見比べる。　　開け  
てみたらと促されて、恐る恐る蓋を開いてみた。

中に横たわっていたのは、大ぶりの丸いピンクの宝石が付いたネックレスだった。石だけでも駄菓子屋の飴よりはるかに大きい。チエーンの部分は、細い金を何本も使って捻りこんだ極太さで、それだけでも相当高価な品物だと覗えた。

これは昨日の侘びと受け取っていいものか。喧嘩の仲裁がプレゼント、どこの世界も男が考える事は一緒なのかと、なんか可笑しく思った。

どちらにしろ、これで落着、とするつもりはなかったので、有難く受け取りながら当初の予定は遠慮なく実行させてもらおう。これから何かと資金が必要になるだろうし、貰えるもんは貰っとけ。

「有難く頂戴します。じゃあ早速で悪いんだけど、午後本宮へ行く予定だから一緒に同行してもらえる？」

「了解！ 僕の黒の姫フジカ様」

ギロリと睨めば、肩を軽く竦めただけで、でろーんとだらしなく破顔一笑。そんな彼に私も気が抜けて、むふつと変な笑いがこみ上げた。

#### 14： ジゴロは死語かしら（後書き）

新しい仲間が加わりました。

相変わらず1話の長さが均等にいかないんですけど、その辺りゆるくお許し下さい。

15： 堅物君にはしつこさで

日が中天を過ぎた頃、私達は本宮である王城執務棟の回廊を歩いていった。

私を先頭に（隣に護衛騎士が張り付いてる所はかつこつかないが）右後方にはニールドラス、左後方にセキンテッド、その一歩後ろにキツポとサトツシユが並び、これで向かい風でも浴びれば、なんとかレンジャーの完成という形で颯爽と闊歩中。

「ほんとに大丈夫なの？」

「大丈夫だって」

「無謀すぎます」

「さつき散々話し合ってたでしょ」

「フジカ様見られてます」

「うっそ」

「悪霊にも見られてる」

「黙ってなさい」

と、実はなんとも情けない会話が繰り広げられていたのだが……。

財務を担当する部署は二階の北側部分を占めているらしい。統括しているのは財務大臣アーコマ侯爵。ジョウラーニの二番目の側妃の父親で、有力貴族の一人。目当てのミンバルクは地方財政を管理する室に所属している。事前情報としては、真面目で堅物、独身の仕事人間、家柄は厳しくキツポと同じ伯爵家の次男坊。まあそれだけ分かっていたれば後は話してみるしかないかと強攻策に打って出た。

回廊を抜け各応接間が並ぶ廊下に入ると、いち早く二ールドアスが部屋の確保に動いた。そして隅にあるこじんまりした部屋に案内されると、二ールドアスがキツポを率いて出て行こうとする。

「待つて、私も行くから」

「何馬鹿な事を言ってるんですか。貴方が行けば物凄い騒ぎに成り兼ねない。今はまだ何の身分もお持ちじゃないんですよ。ここでおとなしく待つていて下さい。私共が連れて参りますので」

そう言われてしまえば、ぐうの音も出ない。う、う、と唸るだけで、結果、狼の勢いに押されてしまった。

彼等が出て行き、小一時間は待たされるだろうと思つていたが、ことのほかすんなり連れ出せたのか、そう時間もかからず三人はそれぞれ違った顔つきでこの部屋に入ってきた。

入れ違いにサトツシュが扉の外に出て行く。彼は一応「黒妃室」のメンバー外であり、ここに私がいるという目印役を担つてもらつた為。

改めてミンバルクという男を眺めてみた。

彼は私の姿を認めると、視線を合わせず俯き、胸に片手を当てて膝を軽く折る。これが本来の男性の挨拶だと習つていた。ここにいる二ールドアスやセキンテッドには見られなかつたが、こ・れ・が、挨拶だ。決して目上の者を視線で射抜くなんて真似はしない。

それは王に対しても同じく軽く膝を折るだけ。始め聞いた時に

は、いかにも簡素な仕草だなと思ったけれど、式典や表彰、褒美を貰う時は床に跪くらしい。その他日常の中では、今の挨拶で十分だと聞いていた。

彼の風体は事前情報通り、寸分のくるいもなく制服を着込み、クリーム色の髪をきっちりオールバックに梳き上げていて、その微かに光る油が固めてます、つてのを強調している。乱れを嫌う頑なな性格を現しているようだった。年は二十五だと聞いていたが、そのせいでやけに落ち着きがあるように見えてしまう。

「お仕事中に突然呼びたててしまって、ごめんなさい。 フジカ・ワラクと申します」

ミンバルクは目線を上げないまま、「いえ」と短く返すのみ。私は彼を円卓の席に促し、残りの二人にも着席するよう勧めた。

「ここにいる者はご存知かしら？ キツポガウスは幼い頃からの知り合いと聞いているんだけど。 あとの二人は私の仕事を手伝ってくれる仲間なの」

無関心からか、仕事という言葉にも驚きの態度一つ見せず、ミンバルクは淡々と頷き口を開いた。

「此処に来るまでの道すがらご紹介は受けました。 そちらにおわすのはセキンテッド様かと」

ひゅう〜う。 渋いねえ。 余計な文言は一切含まず、問われた事だけを確実に返してくる。 どんだけ実直な男なんだ。 こうい

う相手には、あーだこーだと焦らす手法はまずいだろう。もう少し雑談を交えて場を和やかにしたかったんだけど、イライラさせる前にさっさと用件を切り出すべきかな。

「うん。では時間もないことだし早速本題に入りたいんだけど」  
始めてミンバルクと視線が交差した。「いい？」と目だけで問いかけた承を受けると、すう〜と鼻から息を吸い込んだ。

「私はこの国で、王妃として出来る仕事をしたいと思っているの。あ、誤解しないでね、がつつり政治に介入したいと言ってるわけじゃないから。ただ女性の雇用は促進したいと思ってる。それが政治に全く、影響が出ないとは言いきれないけど。それも手伝ってもらう為に「黒妃室」なるものを立ち上げた。貴方にも参加してもらいたいと思って、今日はお願いに来ました」

不安そうなキツポと目が合って、柔らかく笑んで見せた。実は私が一番緊張している。強気な姿勢でここまで来ても、働き盛りの男性に職を変える、しかも自分の下になんて、大それたことだ。彼の人生を変えてしまう重大なことに、プレッシャーで潰されそうにもなる。みんなに責められる夢を見て夜中に冷や汗をかき事も多い。それだけ私は小心者だということだ。けれども始めた以上、付き従ってくれる仲間が出来た以上、自分の責を負わねばならない。弱腰の姿は見せないと、それだけは固く誓っている。

黙ったままのミンバルクに、どうかしらと率直に尋ねてみた。

「お断り致します」

あっ気なく、拒否された。分かっている、どよ〜んとなる気

持ちは許して欲しい。

「そうね、そう言われると思ったわ。　けど少し考えてみてほしいの。　ニールドラスは内政に詳しい、セキンテッドは外国にも要人にも詳しい、キツポとコウルは女性を纏められるわ。　だから後は、現実的な試算を出せる財政面に詳しい人物が必要なの。　貴方の人柄もキツポから聞いている。　信用に値する人だと。　どうかお願い、私に力を貸して」

深々と頭を下げた私に、「おやめ下さい」と三方から声が上がった。

「ミンバルク殿、君のところは兄上が家督を継がれるのだろう。　デイベア家といえは、先代の伯爵、君の御祖父の代に不興を買い、領地も減らされたままだと記憶しているが」

「……………脅迫ですか？」

「いや違う。　兄上が王を支え、君が王妃様をお支えすることになれば、御家門にとっても信頼回復に繋がるいい話じゃないかと思っ  
てね。　それだけじゃない。　フジカ様は、私にも　”満足する仕事を与えてやる”とおっしゃってくれた。　君も男として、一財務官で終わらず高みを目指してはどうかと進言したいただけだ」

「そうだよ、お、フジカちゃんの下はきつと面白いよ。　毎日がスリル満点、退屈せずにいられるから」

「私は……………スリルなど……………」

「もう、変なこと言わないでよ、セキンテッド。せっかくニールドアスが援護してくれてなのに」

「それ聞こえてますから、フジカ様……。でもミン兄、すごく良い話だと思うんだ」

全員が参戦し、キツポが親しげな説得を始めた時、表の扉がドゴンツと、けたたましく鈍い音を響かせた。

入口で番をしていたサトツシユが、大方ノツクを躊躇って、踵で蹴りこんだのだろうと予想出来た。

来るのが早過ぎだ……。

それから数秒もしない内に、バーンと大きな音を立てて扉が開くと、いきなり進入してきた銀色。顔は恐ろしい程の顰めっ面で、直視するのがちょっと怖い。

後ろに続いて来た宰相の顔も、渋面に染まっていた。慌てて立ち上がる臣下達。

「何故勝手に出てきた。ここで何をしている」

おお〜こわっ！

「こちらのミンバルク殿を引き抜きに。あ、そうそう。ネツクレスのお礼に伺ったのが本来の目的でした」

いけしゃあしゃあと言い切り、ちろつと覗いてみれば、忌々しいと言いたげな冷たい青とぶつかった。

ジョイニを相手に、他の皆はきりりと胸に手を当てたまま頭を垂

れて、微動だにしない。いや皆じゃなかった。唯一の例外は、のほほんと笑顔を浮かべて、私とジョイ二の対峙を面白がっているようだ。

「引き抜きにだど。    どの人間だ、何をさせる」

ミンバルクに視点を定め、身元を示せと命じる王太子に、まずは座れと席を譲った。

「殿下、彼はアーコマ大臣の下で、地方財政を担当する者です。従者のキツポガウスから、真面目で堅実な青年だと聞いています。

それで是非、私の所に来てくれないかと頼んでいるんですよ。幸い彼もまだ若く、室長クラスではないようですし、知った者がいるなら余計安心出来るでしょう?」

「だからといって、勝手に城内をうろつき、我を通さずとは筋違いと思わぬか」

「ええそうですね。    婚姻前に無理やり無体をはたらく輩と同義かと思われませす」

「なんだと……」

今にも殺されそうな勢いで剣呑な空気が漂った。    顔は平静を装っているが、内心バクバクでひよっとしたら口元が引き攣っているかもしれない。

一世一代の大勝負とは、大袈裟な例えだが、それくらい緊張感もピークに達していた。    まだ、口説き終わってもいないのに……。    また「未知の生物との戦い」か、と覚悟を決めたとき、そこに、

ぶつと噴出す大物が出現。　ジョイニの肩をポンポンと気安く叩く男がいた。

「はいはい、今回はジョウウラーニの負け。　どうしちゃったの？　冷淡冷酷王子の君が熱くなるなんて。　よっぽど昨日のフジカちゃんが、残念だった？」

「黙れ、セキンテッド」

「まあいいじゃないの。　財務官の一人くらい、気前良くあげちゃいなよ。　それで許してくれるかもしれないよ」

。　それとこれとは話が別だ、というか、別にもう怒ってはいない。　だが乗れるもんなら乗っておく。

「我が何故許しを請わねばならん」

「素直じゃないなあ。　贈り物まで僕に持たせたくせに」

そうまで臣下の前で堂々披露され、王太子としてはこの上なく居心地悪そうに顔を歪めた。　無言のままセキンテッドを睨みつけ、ついでに私を視界に納めると、眉間の皺をさらに濃くさせて立ち上がった。

ああ、光の加減で埃が舞ってるのが目に付くぜい。　ここも掃除を徹底させるよ。

「宰相と大臣に許しを得てからだ。　今後勝手な真似は許さん」

くるりと踵を返し、宰相を連れて来た時同様荒々しく部屋を後に

した。

15： 堅物君にはじつこさで（後書き）

のんびりと展開する場面をと思っているんですが、伝わるでしょうか。

次話辺り、ジョイニ視点でお送りしたいと考えています。（多分）

またお付き合い下さいませ。 よろしくお願いします。

## 16： ジョジウラーニより（前書き）

今回はジョジウラーニ視点でお届けします。

私のサブタイトルは常にふざけていますが、こんな場合みなさんどうしているんでしょうね……。ちよっと考えちゃいました。

## 16： ジョジウラーニより

我に齒向かう……あの女。

湧き上がる苛立ちは増すばかりだが、愉快に物事が運ぶ事に悦とする思いもあった。

「……ふっ」

思わず口元が緩む。何の前触れもなく、こうなる次第が分かっている。堂々と乗り込んできたのだらう。自分が目を付けた男を我の目に曝すつもりだったのか、それとも我の出方をただ探るつもりだったのか。面白い。いや面白いだけとはいえないが。

自分の執務室に戻り、乱雑に首元を緩めると、いつもの定位置とも呼べる机に腰を落ち着けた。

「あそこまで厳しい態度はお見せにならなくても良かったんじゃないですか？」

我の後に続き、室に戻ったモングラントが開口一番そんな事をもらした。自分も知らせを受けた時点で鬼の形相を報告してきた侍従に向けていただらう、とは口に出さず心中だけに留め置いた。

怒りの態をいくら顔にしても、常に気丈に振舞って見せる女。フジカ。しかし一瞬だけ怯み、目線を下げた女。異界の娘。

これまでに何度か不愉快さを示す態度は見せてきたが、今日ほど声を荒げることはなかったらう。臣下の中ではそれが大臣クラス

であつても、顔すら上げること出来ぬ者が数多くいる。それがたった一瞬怯えを見せただけで我から目も逸らさず己を保つたことには評価してもよい。

だが、まだだ。

あれ位でびくつくようでは、この城では渡つていけぬ。

隙を作らず、例え本心では心細くあつたとしても、表に出すことは打ち抜いてくれと心臓を差し出すも同じこと、それを手薬煉引いて待ち構える者が大勢いるのだから。深く入り込めば嘲笑や叱責程度で済むことではない。存在、命に直結するのだということを真に理解しているとも思えない。

ただの気の強い女、多少人を動かす経験を持っている、それだけでは何も残さずすぐに潰されてしまつのに過ぎない。

「これくらいの予想はしていたはず。期待に応えたまでだ」

「それにしても、もう少し姫様に優しくなられては」

「あいつは、そう望んではおるまい。それより調べはついてるか、アーコマとなると少しばかり面倒だが」

「……はい。ニールドラスからの報告で、かの者の調べは簡単には出来ております。現時点では怪しい所も見当たらず、デイベア家と大臣の繋がりも特に御座いません。しかし大臣に打診するとなると、何かうまい口実を作らねば、姫様の周りが騒がしくなり兼ねませんが」

「どの道、近い内には騒がしくなるのも避けられんだろう」

初めてあの女を目にした時、本当に黒の女などいたのかと、驚かすにはいられなかった。

幼少の頃から銀の王子と謳われる一方で、誰も持たぬ色に対する畏怖や嫌悪を目の当たりにし、疎外感も大いに味わってきた。そして年が増すにつれ、伴侶となる者もこの世には存在せぬ、黒を持つ者だと聞かされた。

まるで物の怪同士の婚姻。その時の絶望は忘れもしない。

その告げが何故自分に回ってきたのか、何故この時だったのか、まともに人間かどうかも分からぬ者と婚姻関係を結び、共に国を導き子孫を残すなど、これが聖なる銀に対する扱いかと憤りを感じた。神をも恨んできた。

この国では王族の力を残す為に複数の側妃を持つ事になる、だが正妃となる女は王でなくとも特別な存在だ。それを自分は選び取ることも許されず、怪物かもしれぬ女に授けねばならぬなら……

だが、半分は黒の者など存在するはずがないと思っていた。自国のみならず、自分が目にした色は実に様々がある。ただどんな色を掛け合わせても変わる事のない黒は見たことがないのだ。その女が実際目の前に現れた。

女は見た事もない艶やかな装飾の描かれた衣服で身を包み、我々とは肌の色も顔の造形も多少異なるものの、ちゃんと人の形を成していた。それに安堵したところも大きかったと思う。既に自分は伴侶に露ほどの期待も希望も持つてはおらぬ。人間であり、従順におとなしくしているのならば、他の側妃同様、子種だけは授けてやれよう。それだけを感じていた。

しかし、ひとたび女が口を開いたとき、脆くもその思いは崩され  
啞然と佇む己がいた。

男に、いや王太子である我に向かい、勝気に意見を述べる娘、視線にも敵対する意思がはつきりと浮かび、恐れや王家に対する尊意萎縮も全く感じさせなかった。

いきなり知らぬ世に連れ出され、混乱しているとは分かっているも、その不遜な態度が許せぬと同時に、他の世にはこのような女の存在があるのかと新鮮に思ったことも確かだ。

話を進めていくにつれ、泣き喚くのもなく表面上は悲観に暮れた様子も見受けられなかった。

こちらのどの女にも見られない程、理知的に自分の状況を悟り、周りを注意深く探っては、己に少しでも分がある交渉を進めてくる。その勇敢ともいえる態度は正直好ましいとさえ思ってしまった。女であり、妃という立場にはもつたいないほど。

そうだ、この女は私の妃となる者。

容姿で言えばこちらの者とは多少違うものの、醜い部類には決して入らず、黒々とした大きな瞳も吸い込まれそうな程に力があり、薄っすらとした桃色の唇もわりに肉感的だ。初日は結い上げていた黒髪も、次の日には背中に流され麗しい艶と柔らかさが伝わるようだった。あれだけ黒を嫌悪していたというのに、美しいと感じさせるものは十分あった。体型に関してもみすばらしい細身には見えず、胸の膨らみも尻の厚さもこちらの女と変わりはない。

だがそれだけだ。女として素直に従う器量もなく、仕草は鮮麗されているが、こちらでは伏し目がちな目元に男の食指は動く。

それを正面から真っ向迎え撃つ女など色気のかけらも感じられぬ。

やはり、こんなものだ。得体の知れぬ女など……。

それなのに、女は自分を愛する事も条件だと言いつつ。なん

という女か…… いや、大抵の女ならばそう望むことは分かつてい  
る。側妃達にしても大差はないだろう。だが怪物かもしれぬ女  
を娶ると知ったときから、愛情などという感情を封印してしまつた  
のだから、我にとつては縁遠くどの女に対しても特別の想いを抱く  
事は出来ない。

女とは男に対して欲深く、金銀を欲しがる者か、想いを自分に独  
占させたがる者か、そのどちらかに分けられる筈。

他の世の女も同じであつたのなら、こちらの女の様にせめて従順  
であれば良いものを。

妃としては、落胆せざるをえない。

しかし、どこか興味を持たせる女であつたことは我にとつても些  
細な喜びに思えた。

フジカを離宮に移し、自分も早々に移り住んだのは、その興味故  
かもしれぬ。

毎日顔を合わせても大して言葉を交わすこともせず、それでも側  
妃達のように気を引いてくる様子も見られない。それは驚きでも  
あつたが、どう接していいのかと反対に戸惑いが生まれたのは初め  
てだつた。

フジカ自身はその事に不平を募らせているのではなく、どちらか  
といえは我に合わせて淡々としているだけに見えるが。その点は  
楽な女だつたと言えるよう。

そんな中で食事を共にしている。フジカの作る料理は、どれも  
美しく、味も多岐に渡り、これまでの食事がなんと味気ないものだ  
つたのかと思ひ知らされる。異界で初めて味わつた驚きと感動が、

そのまま再現されるのだ。さすが自ら料理人と名乗るだけの腕前であつた。

ソルニアードにしても、城の料理人達にしても、忽ちその料理に心酔し周りに群がるのは必然といえる。それだけでも国に貢献したのやもしれない。

その他にも、離宮の管理はフジカに預けている。

妃本人が使用人を指揮する等これまでにはなかつた事だが、調理場同様、宿屋の経験から部屋の一つ一つ、廊下の掃除から花の位置まで細かく指示を与えているところを目にしたときは、素直に感嘆の息を吐いた。

庭も単調な風景から、色鮮やかな庭園へと姿を替えていた。

何より働いている使用人達の顔つきが、これまでとは一変している事に気が付いた。みな意欲に溢れ、自分の仕事を楽しんで、尚且つ誇らしげにさえ見えるのだ。庭を掃く幼い少年であつても、床を磨く髭面の男であつても、汚れたシーツを抱えた男でさえも、これがあの女、フジカ力なのか。

異界の女。この短期間で離宮の中だけといえども、男達の意識を変えられる魅力があつた女には備わっているのかもしれない。

己を振り返る。昨日は各領主達を集めた晩餐の席であつても、食が進まず酒ばかりを煽つていた。

離宮に戻り、予想外で久しぶりにフジカの料理を目にしたが、これまでと違って決して見目の良いものではなかつた。しかし酒を飲んだ後にはと、考えられたものは、口当たりにも腹にも優しいものであつた。

ついフジカに手を伸ばしてしまつたのは、酒の勢いだったのか、心が穏やかに満たされたからだったのかは分からぬ。

ただ、フジカの柔らかな感触は我に至福を与えた。今も唇が感触を覚えているように。

あの時フジカが何を思ったか女を抱いてきたのかと言っていたが、そうではなかった。離宮に戻らなかつたせいかと考えてみたが、どの道嫉妬などという普通の女の感覚ではないだろうし、仮にそうであつても前の晩は側妃の部屋で寝た。これからもそれは変わらない。

宝石を送らせておいたが、その効果もあつたかどうかは疑わしいものだ。

あの女、フジカが望むことは、この世界にとっては難しだろう。やると言うのなら見届けても良い。非力な女の力でどこまで出来るのか、あれが自ら潰れず、周りから壊されないことを少なからず願つてもいい。

「式典までに潰されないといいがな」

「その為にオンパツパから呼び戻してまでセキントッド様をお付けになられたのでしょうか。あの方が傍にいれば大概の難は削がれるはず、大丈夫ですよ。しかし、殿下ご自身がお守りになつても良かったんじゃないませんか？」

「我はあれに賛同しているわけではない。危険は遠ざけてやるだけ、諦観の意は変わらぬ」

「ふっ……　そうですね。今はまだ」

モングラントの眩きは王太子に届く事はなかった。

「ならば、今回のことは私からも姫様にたっぷり忠言を差し上げておきましょう」

「ああ、そうしてくれ。二度と出し抜こうなんて気を起こさぬくらいにな」

モングラントの含む笑みに、あれのその後を予想し自然と口端が上がる。苛々とした溜飲はそれだけで下がったようだ。

16： ジョジウラーニより（後書き）

次回からはまた元に戻ります。  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2523p/>

---

王妃！ いや、女将と呼べ！

2011年7月13日10時50分発行